女鑑

明治廿八年一月二十八日發行

第七十九號

東京國光社

女鑑第七十九號目次

辨内侍



今年の女學界

都鄙の別なく、內外の分なく、同じく、新年を迎へて、百般の事爲も、亦、自、其の端緒を改めたり。是に於いて、吾人の、先、眼を注ぐ所のものは、則、女學界の景況なり。事物の進運とともに、學海の波瀾を起し、變動を生ずるは、自然の理勢なれば、女學界に於いても、必、異象を呈せざるを得ざるなり。平時にありて、尙、且、然り。況、此の非常の事あるの時に當れるに於いてをや。

其の變象の、最、著きものは、抑、如何。我が國家の、征戰の事ありしより、國民の敵愾心は、大に振ひ興り、婦女子の愛國心は、益、切實なるを致せり。而し

て、其の、所謂、學問上ゝ於いて、研究し來りし事局の變遷難易を、實地に、目擊するに至りて、其の歷史に於ける感念も、更に、前來の空想臆測に似ず、且、又、世界万國に對する關係の如何ゝ至るまで、直接に、間接ゝ、之を聞知することを得るに至れり。是に於いて、女子が、學問の研究、及、其の應用の上に就きて、大に、前者の狀勢と、其の趣とを異にするものあり。是、則、戰爭の女學界に及ぼしたる間接の影響なりと謂ふべし。

此の影響の及ぶ所は、一般に、我が國民ゝありと雖、殊に、女學の上に現るゝ効果の多きを見るなり。女子の特性は、概して、事の實際、狀勢を知るに迂ゝして、且、廣く、宇內の形勢を觀ることなきが故に、其の大勢如何は、嘗て、夢想せざりし所なり。然るゝ、今日に當りては、非常の刺激を受くるが爲に、萬般の

思想、皆、大に發達して、事理の探究、思はずして、周到緻密を加ふ。故に、今年の女學界に著るゝ現象は、必、意外なるものあるべきを信ずるなり。然れども、冷熱の變轉、甚しきものは、我が邦俗の通弊なれば、忽起り、忽止む先例、歴々として指すべし。故に、唯、憂ふる所は、其の熱度の冷却にあるのみ。唯、能く、之に注意して、實用の學術を精研し、其の應用の正鵠を失はず、以て、大に、之が發達を期せざるべからざるなり。

以上、論ずる所の如く、女子學界の進運、學術の發達は、非常の變化を爲せり。或は、地理に、或は、歴史に、大に、其の沿革を明にし、其の穿鑿を密にし、其の他の實學、皆、之を實驗の結果に徴することを得るもの、其の今後の學海に利益する、幾千万なるを知るべからざるなり。

嗚呼、今年の女學界、此の至大の幸福を得たるもの、實に、女學者の至幸にして、國家の幸慶たるもの、亦、尠少に非ざるを信ずるなり。吾人、深く、之を喜ぶもの、固より、偶然に非ざるなり。

論説

婦人の地位

岩下方平

世に婦人ほど、果敢なく、憫然のものはあらじ、別きて、若きうちは親にしたがひ、嫁きては夫に從ひ、年老いては子にしたがふ、東洋の婦人ほど、果敢なく、憫然のものなからむ。樂天が、

人生勿ㇾ爲二婦人身一　百年苦樂賴二他人一

と歌ひしは、最、その情をつくして遺憾なかるべし。げに、婦人の身の上は、松に倚り、檜の木にからむ、日蔭鬘のごとくにて、遂に、獨立つの期なからむ。されど、諸孃、他に倚るとて、な憂ひぞ。獨立つ期なしとて、な歎きぞ。よし、あだし國の女權などいふ事を慕ふもの、あらばあれ。婦人の卑くて、他に倚るべきは、遠き神代の昔より、定まれ掟にて、今更に、憂ひ歎くべきことかは。見給へや。天津神たちの、此の國をつくり給ふにあたりて、女神、言先だち給ひしにより、適はぬとて、更に、男神の言先だち給ひしを、亦、大國主神の、須受理姫の嫉妬深きを、うれたみ給ひて、吾は、是より、大和の國に罷らむとて、馬に鞍おき、鐙に片足かけて、今や、いで立ち給はむさまなるを、姫は見て、悲しみに堪へず。即、歌ひ給ひし歌に、

八千矛の　神の命や　我が大國　主こそは　男にしいませば　うち見る、島の崎々　かき見る　磯の崎おちず　いづこにも　若草の妻持たせらめ　吾はもよ　女にしあれば　汝をきて　男はなし　汝をきて　夫はなし　云々、あとは若き諸孃に聞かすもいかゞとおもへば、はぶきぬ

このみ歌もて見れば、婦人の卑くて、男に從ふべき理は、神代の昔より動きなき掟なること、瞭なり。さるに、世には、おろかなるえせ博士ありて、命の大和行をとゞめられしは、姫の嫉妬の力にて、神代に、女權の强き証なりといへり。誠に、うつけたる僻論にて、こは、深く論らふべき事かは。次に、邇邇藝能命、笠沙御前に、木花之佐久夜姫を見て、目合せむとのたまひしに、姫答へて、吾は、えまをさじ。吾が父、大山津見神ぞまをさむとのたまひしを思へば、女は、

若きうちは、何事も父にしたがひて、思ふまゝの擧動なく、まして、自由結婚などいふ不倫のことを、善とすべき理あらんや。

故こをもて、婦人の、人に倚り、人に從ふべきは、神代よりの動かぬ掟なる事、瞭なれば、世の諸孃は、西の夷が癖言にまどはされて、婦人に、獨立つ期なきを憂ふべきにあらず。只、憂ふべきは、

をみなへし秋の野風にうちなびき
　こゝろひとつを誰によすらむ

この心ひとつの寄せどころこそ、婦人には憂ふべきなれ。世の婦人には、學の道に深くたどりて、言さやぐ唐の文、あるは、西の國の言葉まで、心えをる身にありながら、父なき兒を生み、人の妻となりては、密夫とつれて奔るあり。かく

ては、什麼物知り、書よみたりとて、何の甲斐あらむ。されば、吾人は、婦人に、學問の深きを望まず。技藝の勝れたるを擇ばず。只、親に事へてはまめやかに、一たび、男に嫁づきては、松の霜雪に色かへぬ如く、如何なる事ありとも、何時までも、操かへぬこそ、いとも望ましけれ。嗚呼、心のひとつのよせどころよ。

女子の讀書

大町芳衛

尋常一樣窓前の月、わづかに、梅花あれば、すなはち、同じからず。中等社會以上の女子は、讀書の樂をこそ知らまほしけれ。美衣、美食など、いたづらに、肉體上の快樂を貪りて、毫も、精神上の快樂を解せざるときは、其の人、自、俗化して、社會の上流に位する資格なきにいたるべし。

憂ふる時來りて、憂をわかち、喜ぶとき來りて、喜を共にし、富み榮ゆといへども、おもねらず、零落すといへども、見棄てずして、常に、紅閨の好伴侶となるべきものは、書物なり。されど、佳肴ありといへども、食はざれば、その味を知る能はず。良書ありといへども、讀書の樂を解する人に遇はざれば、空しく、蠧魚の腹に葬られて、やまむのみ。

女子は、如何なる書を讀むべきかといふに、まづ、小學校、その他の普通學校にて、人世普通の理をさとるべし。即、歷史、地理、物理、生理、修身、算術、作文、習字など、普通學のあらましを知るべし。さて、女子は、長じては、人の家の妻となるべきものなれば、學問の外に、舅姑に事ふる道、夫に事ふる道、兒をそだつる道、交際の道、裁縫の道など、すべて、家を治むるに要する道々を心

得べきは、いふまでなし。わきて、女子は、國家に對して、第二の國民を養成すべき義務あるものなれば、家庭の教育を施すに足るべき資格を備へざるべからず。

されば、女子は、是非とも、國史の大體をしるせる書を讀みて、我が　皇室の尊きこと、我が國體のすぐれたること、我が祖先の功業などを知りて、一定の見識を備へて、これを、其の子兒の清淨なる腦髓に吹きこみて、以て、その忠君愛國の至情を養ふべし。次に、また、地理の大體を知りて、我が國の廣狹、人口の多寡など、凡て、國力の如何をつまびらかにし、他國との關係を明にして、以て、殖産遠征の心を起さしむべし。されど、歴史、地理などは、極めて、眞面目なる書なれば、時には、古の歌集など、ひもときて、紙上の風月を弄びつゝ、しらず

あらず、淑徳を涵養すべきなり。とりわきて、古の烈女の傳記などこそ、女子の親しむべきものなれ。

心を知りあひたる人に向ひて、身の不幸を語ることを目して、一概に、返へらぬ繰言なりと嘲るなかれ。過ぎにし不幸は、語れども、かへらず。されど、之を語ることによりて、不幸の境遇は、爲に、慰めらるゝものなり。おちぶれて、袖に、涙のかゝる時、人の心のまことは知らるゝ世のならはし、心を知りあひたる人は、澆季の世には求めがたけれど、一たび、古の傳紀をひらけば、誰か、來りて、胸襟をひらかざらむ。うきにつけ、樂しきにつけ、手をはなすべからざるものは、げに、烈女の傳なりけり。

佐久間象山曰はく、小説本にまれ、何にまれ、萬卷の書を讀み破れば、心中、自、

潤然として、大に悟るに至るべしと、しか〴〵。此の言は、眞に、活眼を以て、書物を讀み破りたる人の言なり。されど、小說の如きは、未、萬卷を讀み破りて、大に悟るにいたらざるうちに、しらず〳〵、之の弊害に感染せらるゝ恐あれば、殊に、注意せざるべからず。すべて、小說は、審美の眼孔を供へて、これを讀まざるべからず。されど、世には、審美の眼孔を供へたる人、極めて、すくなし。國學者、漢學者、教育家、政治家などは、とりわきて、審美の眼孔を有せざるもの多く、かの文學中の、最、進步したる小說を捉へて、徒に、淫靡を說き、風教を害する書物とするもの、比々、皆然れば、余は、世の女子に向ひて、小說を讀まむことを勸めず。何となれば、家政の繁務に當る人にして、審美の眼孔をそなへんことは、困難なればなり。唯、理想の純潔なる小說は、この要な

し。理想の純潔と、作の巧妙とは、必しも、相並行せざれども、亦妨げず。馬琴の作の如き、勸善懲惡の小說は、あながちに、排斥すべきにあらず。水野の改革に、絕板を命ぜられざりしも、偶然にはあらざりけり。

とまかくに、社會に、上等の位置を占めむと欲せば、俗氣を去らざるべからず。而して、俗氣を去るに、最、よく適するものは、書物なり。必しも、江東の二喬にならひて、兵書を讀むを要せず。亦、日本紀の局にならひて、日本紀を諳んずるを要せず。唯、その好む所に從ひ、暇ある每に、相對して、喜憂、相分ち、吉凶、相弔ひて、以て、大に悟る所あるべきなり。

女子處世論

三輪田眞佐子

第十四　節儉及勤勉

これ等の題目は、既に、女子要言にて述べたりと雖、本論を全うするに必要なるを以て、亦、玆に一言せむ。讀者、怪みな給ひぞ。

そも〳〵、聖人、君子にあらざる限の人は、概、衣食足り、住居安らかにして、始めて、禮節を知り、人德を盡し得るなり。故に、人は、先、衣食住の補給策を謀らざるべからず。然るに、一般の女子は、男子のやう、進みて貿易をなし、退きて牧畜をなすことなど難ければ、唯、位を內に正うし、もて、家政を主るに當り、節儉を行ふ一事に由り、衣食住の困難を防ぐべきなり。

老子曰く、足ることを知るものは恒に足ると。おのれ、之を金言と信ぜり。凡、

人は、その觀念の極めやう如何によりて、種々に感じ得らるゝものなり。見よ、賤のふせ屋に住む人も、足ることを知る人は、秋夜の月色、春曙の鶯聲など、宇內の消息、樂しからざるものなからむ。反りて、金閣玉樓に居る人も、足るを知らざるときは、園に、始終散り、且、萎まざる花樹なきを歎き、食に、梁肉より、なほ、勝れるもののなきを怨むなど、生涯を、唯、悲愁の間に送るらし。かゝる理を以てゝや、節儉を守る人は、恒に樂しく、奢侈に流るゝ人は、常に、憂ふるものゝごとし。

節儉は、吝嗇とは、全く異なるものなれば、混同すべからず。即、節儉は、德を行ふの本なり。吝嗇は、不德を爲すの基なり。元來、節儉をせよかしと、祈る所以は、拜金守錢のためにせよと言ふにあらず。あるは、公益のため、あるは、自

個のため、萬一の秋に、必要の、需用に充てむために外ならず。そは、物には、定量あるものなれば、今日、徒に、消費することあらば、明日、大に、困窮せざるべからざればなり。蓋、識者の眼より視れば、人は、分限相應の飲食をなし。身分、相當の衣裳を纏ふものこそ、眞に美なれ。しかるに、節儉の徳なき人は、外面を飾るに汲々として、内心の苦痛を釀すとぞ。

今や、國事、頗、多端なれば、その結果、現在、及、將來に於て、大に、邦家の、財力を養はざるべからず。然り。富國の源は數多あれど、國民各個の節儉は、尤、肝要なり。實に、風俗の源をなすべき婦女の心すべきことにこそ。

獸にして穴を作らざるものなく、鳥にして巣を營まざるものなし。これなん、生物の造化に對する必定義務なる。況して、萬物の靈たる人は、自、生活せざる

べからず。おのれのいふ勤勉とは、この天命の義務を果すことなり。乃、賤者は賤者の職あり。貴人は貴人の務あり。決して、他力を恃み、飽食、暖衣、逸居をと求むべからず。

人、動もすれば、勞をさけ、逸をとるを以て、安樂の術なりと信ずるものありけらし。されど、天地の命數、かゝる僥倖を許さず。故に、勤勉する女子は、家務運び、世望揚り、その上、身體は健康さへなりて、期せずして、眞の幸福を享け得らるべし。周詩にも、豈弟の君子は福を求めて回ならずとあり。反之、怠惰なる女子は、家業遲滞して、不幸の生涯を遂ぐるならん。實に、人は、善行をなせば善報あり。惡因をなせば、惡果あるを免れず。これを、自然の制裁といふなり。あはれ、能く、身を世に處せんと願ふ女子は、自然の制裁を了得せよ。

史談

辨内侍

大町桂月

南朝五十年の春、東風吹き荒れて、豺狼、路に横はり、雲深き吉野の奥、花に涙をそゝぎ、草しげき黒木の宮、鳥に心をおどろかす世のなりゆきのうたてさ。よなよな、玉夢おだやかならざりし御有様、申したてまつるも、いと、かしこし。三木枯れ、一草しぼみ、忠臣、前後、熱血を賊庭にそゝぎ、一命を鴻毛にくらべて、骨を野外の月にさらしたる跡、いづれも、あはれならぬはなきに、色も香もゆかしき一本の名花、空しく深山の奥に朽ちはてゝ、かぐはしき心の一輪の花片、谷水の流るゝまに〳〵、世につたはりて、永くあはれをとゞめたる辨内侍、げにや、才色人にすぐれ、德操世にまれなるに、一生、薄命をきはめて、恨を南山の雲に付したるは、いたはしきことの限なりけり。

辨内侍は、右少辨俊基朝臣の娘なり。後醍醐天皇、北條氏の惡をこらさむとしたまひしに、その謀もれて、俊基朝臣は、首謀者の事とて、關東に捕へられけるが、終

に、葛原が岡の白露と消ゐうせぬ。その妻なる人、身の不幸をかこつのあまり、浮世を三衣の中にさけぬ。かく、父には死別れ、母には棄られて、よるべなき孤兒の身の上、かなしがりて、俊基朝臣の兄、行氏卿は、辨内侍をその家にむかへとりて、子のごとくいつくしむに、心なぐさめられて、おぢきなき世をすごしけるに、その才徳、いつしか、雲の上に聞え、召しいだされて、後醍醐天皇の宮につかへけり。東魚西鳥、一場の夢に歸し、天下は、獼猴の如きものにかき亂されて、後醍醐天皇、都をいでさせたまひて、吉野の行宮にうつりたまひしほど、辨内侍、また、従ひまつりて、かしづきたてまつること、いよ〳〵怠らざりけり。

或夜、みかど、中納言隆資卿、洞院の實世卿、宗房卿など、御前に召しいださせたまひ、御酒たまはらむとて、辨内侍に酌取らせたまひけるに、いかゞしけむ。はからずも、御土器、おとせば、二片にわれぬ。御けしき、かはりて見えさせたまひければ、内侍、直に、

さかづきのわれてぞいづる雲の上

と。よみいでけるに、いと、興じたまひて、誰か、下句、つけよと、おはせさせた

たまふ。宗房卿、とりあへず、

　はしのくらゐの光そへばや

と。つけゝれど、みかど、御感、なゝめならず。いと、こゝろよく、御杯、かたむけたまひて、夜のあくるまで、うたげしたまひきとかや。げに、この内侍の才の人にすぐれたること、これをもて、おしはかるに足りなむ。

かくて、後醍醐天皇は、御いたつき、おもくならせたまひて、つるぎを按じつゝ、みまかりたまふ。御心の中、いかに、くやしけむ。内侍は、怙恃を失ひたる孤兒の身のよるかたなきに、今また、君に別れまつりて、悲歎の涙に昨日と暮れ、今日とすごしけるほどに、ゆくりなきことこそ起りけれ。内侍は、才德のすぐれたるのみならず。類稀なる美人にして、柳の腰、たをやかに、紅の頬、香露したるが如く、一たび笑へば、吉野の花も色なく、三五の月も光を失はむばかりなるが、賊將、高師直、いつのほどにか、垣間見たりけむ、思慕の情、いと、切にして、人目をしのぶずりの、亂れにみだれ、思ひたえなむともかりを、水莖の跡によせて、幾度か、送りけれども、心高く、操正しき辨内侍、いかでか、逆賊の心になびくべき。いたく、

そのなめげなるを怒りて、手にだに觸れざりけれど、丸木橋のそれならで、むなしく、ふみかへされて、夢魂、いたづらに、峯の雲に迷ふばかりなりけり。かゝりしほどに、師直、ふと、思ひつきたることあり。その知りあひたる女、辨内侍の叔父なる三位行氏卿のもとに、親しく行き通ひけれど、その女して、ひそかに、行氏卿の北の方に、切なる思を打明して、さて、いはしむるやう、思ふこと、かなへしめたまはゞ、三位殿の位をすゝめ、領地を、あまたつけ侍らむなど、利をもて誘ひけれど、北の方、慾に目くれて、之をうべなひぬ。さて、辨内侍におくる文をとゝのへ、梅が枝といふ侍女にもたし、侍、二十人ばかり添へて、吉野の行宮につかはしけり。之の文に、はるかにこそ渡らせたまへ。山里の御すまひ、さこそと思ひやらるゝごとに、袖をこそ絞りあへね。御こひしさの、いとせめて、住吉へ詣で侍りしほどに、道のたよりも、然るべけれど、あひたてまつらむことを思ひて、河內國とかや。高安の邊に知りたる人のさふらふに、參りてこそ、待ちたてまつれ。はかなき世の中の、まして、みだれがはしければ、此度ならでは、いかで相見むなどかきて、その終に、

あひみむと思ふ心をさきたでゝ袖にしられぬ道芝の露

とありけれど、年頃ろだてられて、恩あつき叔母の身の、かくむかり慕ふ心の切なるに、梅が枝さへ、年久しくなれたる女にて、その言ふこと、まめだちて見ゑければ、いと、なつかしくて、君に奏しけるに、御暇たまはりければ、うれしさ、いはむかたなく、女房二人、青侍三人つれて、たちいでぬ。その路に、人あまた、いであひて、いふやう、北の方は、高安にまちておはしたれど、やみがたきことありて、住吉にゆかせたまへり。されど、遠けれど、かしこまで行きたまへといへば、青侍ども、首をうちふり、そは、心得ぬことかな。高安までとて、暇たまはりて來りたるものを、いかでか、はるばる住吉まで行かるべきとて、いなみければ、いたく怒りて、その三人を打殺してけり。二人の女房は、唯、わなわなとふるへるのみにて、せむ術を知らず。かの人々が、内侍の乘りたる輿を舁ひてゆくまゝに、從ひゆきぬ。内侍は、たゞ、鬼にとられたる心地して、輿の中に、ひた泣きになきつゝ、石川といふ處までゆきしほど、楠正行、吉野の宮にめしいだされて來りけるが、輿の中に女の泣聲、しきりなれば、いと、あやしみ、立ち寄りて、その故をとへば、あざひ

かれて、奪ひとられたるなりといふ。正行、やがて、ひきつれたる郎等に命じて、そのくせものどもを捕へしめけるに、大方はいけどりぬ。三人、四人、劍ぬきつれて、斬てかゝりけれど、之をぞ、みな、殺しつ。たすけ得たる辨内侍と、いけどりたる曲物どもをゐて、吉野の宮にまゐりて、この由、奏しければ、梅が枝を詰問せしめたまふに、師直のたくみなることと、わかりぬ。こゝに、曲物どもは、みな、殺し、梅が枝をば、尼となして、京都にかへしけり。かく、辨内侍の危難を免れしは、またく、正行の功なりと、後村上天皇、ふかく、よろこばせたまひ、内侍を正行にたまはらむと、おほせさせたまひしを、正行は、

とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばむ

といふ一首の歌をたてまつりて、いなみまつりぬ。そは、いさぎよく、討死して、君恩に報いむと、心定めたる身の、女などにかゝづらひて、おくれを取らば、此上なき不忠なるべき、また、一日の恩の爲に、百年の身をあやまらしむるに忍びざれどなり。されど、そのつれなきは、眞に、つれなきにはあらで、なかなかに、情深き武夫なりけり。

れくはせもなく、正行は、如意輪堂の扉に、むなしく、無き數に入る名をとゞめて、その身は、果して、四條畷の朝露と消えうせぬ。あはれ、赤繩結ぶに由なかりきといへども、みかどの許したまし夫、危難をすくはれし恩人、いかでか、よそに見過すべきとて、内侍は、後に、龍門の里に、さゝやかなる庵を結びて、一生、かたく、操を守りつゝ、正行の冥福をいのりきとかや。

今時の女は、重きがうへの小夜衣を重ねて、恥とせざるならはしなるに、古の女は、ちぎりもかはさゞる人にだに、かくむかりの操は、たてけるなり。

孝女さよ子

山崎永太郎

こは、さよ子の父、德田又左衞門元定の自記すところ、今原文のまゝを揭げて、其の傳に代ふ。

おのれ、寬政七年、正月十四日、今の高柳町德田芳澂が家に生れ、父は元廉と稱し、兄は元寧と申したりき、おのれ、文政の頃、尾上町に、一家をつくりいとなみて、すみたりき、妻は、中島町岡村幸右衞門が、むすめにて、つるといひき、天保三年辰

三月十七日、女子を生む、さよと名つく、安政のころ、聟をとりたり、されど、聟は、すみうしといひて、さよが、懐胎のほどに、はなれにき、おなじとしの五年午十一月十九日、孫うまれ、孝治と名づく、ことし、十五になりたり、そのかみ、さよは、二十七なりき、おのれその頃より、中風をやみたり、はじめは、かろき症なりしかど、うしろめたくなりて、紀の國熊野の大瀧をさめ、また、御神樂のをりにも出でざりけり、みかぐらにては、二口頭になりき、其の後、聟をもとむれども、程につけたるものもなかりしかば、さよ、おのれが、介抱のひまなく、あきもの、またはたちぬひをして、やしなひけり、長き年月なれど、いつうんじたり、と見ゆるけはひもなく介抱せり、御一新となりて、橋本中將實梁卿、度會御府にいりまして、明治元年辰の十一月、宮崎御學校に、さよをめしたまひて、父母の孝養ゆきとどきたり、とほめたまひて、かしこくも、朝廷より、たまふよしにて、金千疋をたまへり、そのよし、板にしるさせたまひて、はひりにかけしめたまへり、橋本卿の御手許よりも、金二百疋をたまへり、誠にかしこく、有り難き御惠みなりけり、同じ三年午の六月朔の芳藏、ことまめやかに、はかりて、おのれを、わが家ようつし

て養ひけり、あけくれ、おきふしの介抱は、さよなんしける、同じ年の閏十月二十五日、妻はなくなりぬ、六十四なりき、孫は、こぞの秋、通村の木だくみ、出口治右衛門が弟子となしつ、おのれ、ことしは、やまひのあつくなりぬるを、さよ、かなしみて、月ごとに、尾上山なる、琴平の社にまうでゝ、父のやまひのかろみなんことを、祈りしよしなり、されど、さる事は、おのれにも告げざりければ、家うちに知るものもなかりけり、さてありけるに、ことし明治五年壬申七月十二日、ゆくりなく、みさぶらひとおぼゆる、來まして、この家にさよといふ女やある、とゝはる、こは何のかゝつらひごとか、いできにけんとおもひわぶれど、なしとも申がたければ、ありと荅ふ、さらば、これへいづべし、いひいるゝ事ありとなん、せんかたなくて、さよを出しければ、その方がことを、少宮司殿、きゝおよばれて、寓居にめさるゝあひだ、明日それの時、こよかし、ゆめ、なほざりにきゝすぐすことなかれとなり、おのれ、おもふやう、いかなる事をきゝおよばせたまひて、さるやんごとなき、あたりより、めさるゝならん、心安からぬ事かな、とおもひしかど、さよは、まゐり侍らん、といひてゆきけり、其の日、くれてより、さよは、ふろしき

に物あまた、包みてもち、あとには、たわら米をつりきたる、さよは、はひりより、けふは、あの御米をたまはり侍り、この御料理をたまはり侍り、といひつゝ、はしりまはり、家うちは、七月十三日の事なれバ、節季のやりとりに、人のいでいりもしげきに思ひのほかなる、ちやうちん、褒米のかどにとゞまるを、見おどろきて、こはいかに〳〵とさよにとふに、孝行者なりとて、たまひ侍り、といふにぞ、おほかたは、しられける、とばかりの、ことにも、なかるゝは、中風のならひなるに、ましてかゝる、ありがたき、事なれど、おのれ、大聲をあげて、なきかたじけなみ、家うちも、よろこび、あわてまどひて、御米をつりこし人には、とみに、何のあへしらひも、せざりしは、心ぐるしかりし事なりけり、しかしありて、さよが、かたるをきくに、ことひらの社に詣でゝ、父上の病の、かろみなん事を、一つに心祈り侍り、折しも、きのふ、來ましゝ、御侍も詣であひたまひて、とひたまふにつけて、ありのまゝを申し侍りしを、少宮司様のきゝたまひて、けふは御前にて、かゝる、御恵をかうむり侍り、又女のことなれどとて、御女中様方をめしたまひて、かゝる御料理をたまひ侍り、この御金をたまひ侍り、誠に夢心地し侍り、いかで、このた

まものを、父上家内の者、また母上の靈位にも、備へまはしくて、いたゞきてもてかへりけり、とかたるをきゝて、又ひたなきになきて、かしこみ、うれしみ、よすがら、寢られずして、よみける

孝なりとみまへにめしゝたふとさは
　たびしたわらの米のかず〳〵

たまはりし米のみならず藤どのゝ
　たかきみまへにめしゝかしこさ

おのれ、わかきころより、歌をこのみて、後の鈴屋(健亭)、藤垣内(大平)二先生、また、足代先生につきて、よみしかど、今は老しれ、やみはけて、うたのやうにもあらぬなり、このをりの、少宮司殿はみちのくまで、戰場に出でたまひし、あのゝ津の御家老なりし藤堂仁右衛門高泰殿なり、みさふらひと申すは、度會縣の官員伊勢章仲殿にて、もと尾張の藩士なりしよしなり、この章仲殿よりも、御金をたまひ、また厚き御志の事をも、うけたまはりけり、とり〳〵有り難き事なりけり、明治三年午六月には、紀の國熊野御崎神官岩尾殿とひきて金一兩をあたへらる、又熊野古座浦

水屋新作殿、木たくみ庄六殿、同志の人をもよほして金七兩二歩をおくらる、今はわが身のおきふしだに、かなはぬ、おのれなれど、たゞみめぐみをかけたまひし、御方方を、拜みてくらすのみなり、

明治五年壬申八月　　德田元定

漫錄

赤穗逸話　　あ、ま

半右衛門は大石氏の家來なり。大石氏、忠義を輝して、江戸にて忠死せし後は、離散して、沙汰やみぬ。

茶屋宗古、はからず半右衛門の浪人中に入魂になり、五六年の間むつましく語らひけるが、ある時、宗古、申けるは、嫡子によめとりたくおもひ侍れど、歷々は聟のいたみ、大名の末女、旗本公家はらも私事なり。然し筋目ある娘こそ嫁に致し度と折々語りける、

半右衛門、尤なり、よろしくあれかし、聞たつべしとて過たりしが、折を考へ、よき嫁あり。しうとを正敷人なりと語りぬ。

宗古　申けるは、夫こそ然るべし、万端賴入なり。

御身にまかせ侍るとて、喜悦して申ける。半右衛門も、さあらバ、よくうけと〻けむとて、其後五六十日、宗古が家へ來らず。

宗古は、如何、半右衛門致されしか、久しく音信なし、もしや身まかりし事もやと案じ煩ひ、家へも人なんど遣はし見せけるに、是まで住ける家にはあらざりし由なりければ、彌心もとなく過しに、六十日斗り經て、半右衛門、來り、數々の物語して、扨、兼て申入たりし嫁のしうとめへも語り侍りけるに、先にも一段とよろこび侍るなり、よつて結納遣し申さるべし。と云。

宗古は餘り事急にて、いまだ先方もよくはしれざるに、さし當りいかゞとおもひける處に、半右衛門が氣色、もしいなみもせバ、打はたしもなすべきやうすなり。宗古心中におもひけるは、結納はたがひに聟の家しうとの方もよく聞きさだめ、其上にてこそさし越す通例なり、さるにさもなく只今こされよとの事、さて心もとなし、殊に宗古といはるゝ者、卒爾に嫁とりたりなんどいはれんもはづかし、又いなみもならじとて、奥に入り、内方へもかくと語り、此上は是非なし、たとへ嫁とりて、此家をつぶすとも、宗古が家運、是までなり、半右衛門、久々入魂し、麁略の者とおもはざりしにより、萬事、頼み入り、其元次第といひしは、宗古が無念なり、是非もなき事なり、まつ半右衛門が申にまかせんとて、のし、壹把・杉原二帖をそへて、半右衛門にわたしけれど、半右衛門受取、一段めでたき結納、是にて萬事相すみたり、

明後日御婚禮あるべし、明日は道具さし越し申すべしとて歸りけり。

宗古、いよ〳〵案じ、歸路に人をつけて見せける處、半右衛門は家に歸りて申しけるやう、御姫樣の御結納、今日持參致しはべるとて悦ぶ聲きこえけれど、物見の者もあやしみながら、其由を立歸りて、宗古に告げにけり。

さて、翌日、やゝ暮かたになりて、道具品々、長持三拾棹、其外、あまたの人數三百人ほどにて夫夫に上下、着たるなどかしづき、半右衛門は殊におもだちて來りぬ。

宗古、おどろく事大かたならず、昨日結納のおろそかなりしに替りて、かくおびたゞしき有さまにて、鷹羽の紋つけたる提灯百ほどともして立ならびて入り來りければ、俄に騒ぎたち、それ〳〵に申付、饗應いたしことぶきけり、扨、半右衛門はじめ次々のものに祝義等をなし、おもだちたるものにはこがねを遣はし、釣臺かつぎし人足へは、鳥目三百文つゝ皆々日雇の心に叶ひけるほどあたへて歸したり。

宗古、おもひけるは、かほど迄に、道具もかずかず差こしたるが、いまだ舅は如何なる人ともしらでありければ、なほ〳〵案じけり、内義など申けるは、宗古 代々富限人とて人にも知られたり、定めて盜人のかくはかりて、今宵忍び入らんために、長持には人を入れてさしこしおきたるにやあらん、重き長持明けて見るべしとて、一つびとつ重きをこゝろみ、疑はしきものぞ、相鍵にて明

けて見しに、夜着二つと、底にかけ硯二つあり、其外の長持五ついつれもかくありけれど、宗古夫婦をはじめ、家内のものども、如何なる事も、心におち入らず、案じ〳〵て、よくも寝入らぬにはや、夜も明けにけり。

さてあるべきならねど、翌日は、祝言の仕度を、不思議のおもひをなしつゝとゝのへけり、かくて、時刻にもなりしかど、それ〳〵役人つきそひ、挾箱一つ、提灯二つ、嫁御寮の乗物には半右衛門つきそひ、さし添の下女三人付きたりけれど、玄關にておろし、則ち乗物より立ちいで綿ぼうしもとりて、奥へ通りし嫁の姿、類なくけだかくありけり、宗古夫婦は、始めて安堵のおもひをなし、別して目出たしとは、述べながら、且は心のうちには如何なる人の娘にやと、なほあやしく思ひぬ、婚禮の式もことなく調ひければ、半右衛門も大きに悦び、やがて歸りぬ、

宗古、おもふやう、半右衛門、今宵はさだめて、舅の家に歸へるべしとて、心きゝたるものを、そとあとにつけて遣したるに、半右衛門はそれともしらず、寺の内を通り、その前の家に入れり、物見の者は、何とぞ近くよりて内の様子を見ばやと、靜なる方よりしのび入り、勝手の方の壁によりそひ、物のすきよりうかゞへば、半右衛門、殊の外よろこびて申すには、

さて〳〵一段とよき首尾なり、みな〳〵酒のめとて祝ひ、寺の住持をもよびて、酒などふるまひてかへし、召遣ひのものもみな〳〵心ちよげに寝入

たり、半右衛門は上下ぬぎ、のしめのまゝにてね入りぬ。

夜の八つ時分と思ふころ、半右衛門おきいで、召つかひをよび、夜もわけぬ、おきよ〳〵と呼はるにつけて、よひの酒きげんによく寝たるものども何れもおきたり、

半右衛門、火打とりだしてうち付け、彼方なる佛前に燈明をとぼし、位牌にむかひ、うやうやしく拜禮して、

私義、御姫様を、御預り申しけるゆゑ、是迄御供おそなはり、無念ながら、今まで存命仕り候、もはや、年月の大望をとげて、更に思ひのこす事なし、是までなりとて、やがて諸はだおしぬぎ、心よく切腹の體なりしかバ、物見のものおどろきあきれ、早々立かへり宗古に、かくと告げけるに、宗古も大きにおどろき、其事を嫁にとひたるに、

扨〳〵不便に侍り候へども、かねてより左様の心底なるべし、

恥しながら、わらはは大石内藏助が娘なりとて、なげき入りぬ、

宗古、はじめて、うたがひ晴れて、いよ〳〵おどろき、且は半右衛門が、忠義をふかく感じ、すぐさま彼寺にはせ行き、あとの事どもあつくとりまかなひ、法事など念ごろにしてよくとふらひけり、誠に上に忠義あれバ、下にも亦かく忠義なるものありけるか、これなん寶永六年丑の四月上旬の事にてありける。

讀書一斑

下田義天類

和學辨に「徂徠の答問錄、東涯の雜僁大旨、皆平假名なれバ、れき〱の學者に似合ぬことゝ、しかる。學則や、古學旨要が眞字なれど、此樣なるかたき書は、當代ははやらぬとしかる。しからばいかゞして能き事やら。兎角、書林の氣に入るやうに仕立る手段のみなり。それ故、近來の書は、あきなひ物となりて、尊き事は遠さかるなり。表紙を唐本のやうにすれバよろこぶ。人情の輕薄おもひやるべし。いか程、表紙は唐にても、中の唐にてなきは、又、人をあざむくにて、いといやし。たとへ、表紙和にても、中をゝせめて、拙からぬやうに仕立る事はならずや。それも、はじめにいふごとく、本屋の氣は入るやうにと、手段する故に、學者の自由にははたらく事ならぬもをかし」といへり。表紙をからめかすは、いふも更なり。もし、中が唐めきたりとて、若くは、歐米めきたりとて、價値は、外國風によりて生ずるものにはあらじ。日本人の著述としては、それ、猶、彼吾をあざむくものといふべし。されど、この一事は、大體同意を表したき一章なり。著述屋の手段は、昔も、今も、改正進歩の世運にもれたるやうに思はるれどなりけり。

清兵の敗る丶所以

横井知眞多

等しき武器を持ち、等しき戎衣を裝ひ、等しき兵數にて立向ふ時は、勝敗はそれいづれに歸すべき

か、戰の勝敗は、武器によりて然るにあらず、戎衣によりて然るにあらず、又兵數によりて然るにあらざるなり。權勢飛鳥をもおとさむとせし平氏の武器戎衣、いかに鋭くうるはしかりけむ。所領天下に渉らぬ處なき平氏の兵數、いかにさはなりけむ。されどいかにせむ、流人として顧みざりし、源氏の壓する所となり、あるかなきかに奔竄したりし殘黨等が、集合の將として上り來りし、義經範頼が一喝の下に、宇治瀬多の守を失ひ、玉敷の都をも後に見て、父祖が心をこめて作りけむ、福原の金殿玉樓も、遂に永住することを得ず。たのめりし一の谷の要害も、上げ羽の蝶の幕、ひきもつゝかず。檀の浦わの潮の上に、うたかたの消えてはかなき跡を弔らはしむ。さてこそ勝敗はこれらが主因とならざることいちじるかるべけれ。武器はといへば、泰西の新發明をもて有名なる、連發銃臼砲など山の如くあり、多きが中にあかぬもののあるはとふ處にあらず。ましてわれに幾倍せる甲鐵艦あり。戎衣はたわが兵士のと甲乙なし。國はとへば廣し。廣ければ人さはなり。我國の十倍と稱す。あはれ清國はかばかりの武器戎衣兵數ありて、而して牙山の昔より蓋平の今日に至るまで、一度だにも勝ちしことなく、風聲にも鶴唳にも驚き恐るゝこそ、源平富士川對陣の時、水禽の羽音に恐れしことをも思ひ起さしむ。天時正に寒く、わが國人に適せざる風雪あり。わが兵地理に馴れざる利あり。さるを敗報頻りなるは、いかに天津をおのゝかすらむ。いかに北京を動かすらむ。

人或はこれを武術の不鍛練なるに歸す。それ然らむ。されどなほ然らざるもの重くして存す。そは他にあらず、兵の心の和せざるによる。和せざる兵五大州中に滿ちぬとも、はた何ほどの事かあらむ。されど和せざること由來久し。君君たらざるによりてなり。さるを三千年の昔より、君臣の別明かにして、よし火の中水の中、劍の席鋒の褥にも君の爲には、一滴の涙もおとさず、打ち笑みつゝ進み向ふわが臣民の敵手となるを得べけむやは。かく神代の昔より、君臣に定まりあるによりて、君は父の如く、臣は子の如し。父子の如く相和せるわが國は、たゞ書の上に、忠をとき、孝をいふ汝等と、均しなみのものならむやは。忠孝はもとよりもちて生れたる、わが兵の武器には神あり。戎衣またみだりに靈なき汝等の傷を甘ずべしやは。これ兵數は少なけれども、多きにまされる所以なり。かの源氏が勝ち、平氏が敗れしも、おのれはこを兵士が主家を思ふ心の、厚薄に歸せむとするなり。汝が國かゝるもの、一人にてもあるべきか。これ清兵の戰ふごとにまけ、いまだ曾て一たびだにも、勝つことを得ざる所以なり。されどには汝等に望むべからず、蓋、天祐なればなり。ただわが兵の心を見て、やゝ鑑る處あらば、いささか見るに足るべきものの出來べからむ。あはれ。

むかし物語　須賀廼屋主人

○鬼の眼にも涙　（えせ物語）

むかし、男ありけり。腹黒き人をにくみて、よめ

る、

胸にたる八束の髯はしろくとも
こゝろ黒きぞうたてかりける

かくよみて、同じ心の、ある人のもとへおくりけるに、その人かへしゝて、

丹波ぢや笹山あらしそれよりも
ながきはひげと爪となりけり

男、またよみける、

八つかひげ胸さきにまでいたれるは
なにを悲しび泣きいさちけむ

こをきゝて、ある人、鬼の眼にも涙、といひけり。

○うはなり姫　（しみのおと物語）

源氏、つれ／＼草などに、よき人の、はふれ零落れたるは、子うま子までも、なまめかしかれど、なりあがりて時めける人の、したり面なるは、片腹いたきよしいひけり。げに、理ある言の葉なるが、なほ、その人は、暫からき浮世の浪風を、しのぎきしなれバ、うきもつらきもわきまへて、思ひやりてふこともあめれど、そがむす子、むめ女などにいたりては、昔わすれて、人を人ともせぬ擧動あることうたてきかぎりなれ。かてゝ、女は、嫉妬ふかきより、めしつかひ、はしたなどの、容貌うるはしきは、己が姿にたちまさらむを恐れて、しへたげ苦しむるなど、淺ましきかぎりをつくす者あり。かへす／＼もくやしき極にこそ。

いつの世にかありけむ。例の時めける人に、姫君おはせり。容姿うるはしといふにはあらねど、醜しとにもあらず。化裝し、容くりておはすれバ、あ

はれ、よき姫君よとて、ひそかに、思ひあくがるるすきものもありけり。かく、よき姫君にわたらせらるれど、をしきは、嫉妬のつよきにて、あはれ、この姫君の殿もたせなど、いかに嫉り給ふらむ。神代のむかしの須受理姫や、三縁山の泣姫にも、よも、劣り給ふまじなど、はしたらが品評のをりに、さゝめくこともありきとかや。さて、この家につかへしはした女の中に、こしといふは、元は、よしある人の女にや。かゝる賤しき中に埋れても、天のなせる麗質はおほはれで、磨かねども、光るばかり臈たきより、鷄の群なかの鶴よ。枯野の菊よ。氏なくとも、やがて、玉の輿にのらむは汝よなど、人々のもてはやすものから、姫君は、けおさるゝ心ちして、つね〳〵くやしう思ひゐ給ひしに、その頃、あらたに雇ひし取次のおきなの、こしを見て、姫達とやおもひあやまりけむ。ねもごろに、ゐやをなしゝより、姫君の妬は、一しほにつのりぬ。さるに、ある日、こしが結ひし髪と、つけし赤き襟のもやうまでが、ゆくりなくも、姫君のとおなじかりしより、姫君は、日ごろのうらみ晴すべき、よき機會なりとおもほして、直に、こしを、おのが部屋に召し給ひ、いましは、おのが容姿にまんじて、つね〳〵、主をあるじともせぬ擧動おほく、まして、今日は、われと、髪衣裝までひとつにするは、そも、汝は、主のわれと、きほふ心にや。それにて、汝は、人のめしつかひたる道の、たつと思ふやと。さすが、言葉はしづかにの給へど、まなじりあがり、額にすぢた

ちて見えければ、心よわきこしには、恐ろしさ、身の毛もよだつばかりにて、お前にひれふし、またく、わらはのいたらぬ心より、かゝるふつゝかをなしゝにこそ侍れ。などか、けしき心の侍るべき。あはれ、罪のほどは、ゆるさせ給へと、涙ながらに、只管に詫びければ、やう／＼姫君の心とけ、ゆるされて、お前をしぞきぬ。それより、こしは、また髪を結ばず、絹をつけで、畏みつかへしといふ。浅ましく、また、あはれなる話なりかし。あはれ、今の世の諸姫にも、かゝる君のありなば、はやく、心あらためて、優しくふるまひ、淑き令嬢とよばれ給へや。

松平左少將直政の母

新井白石

左少將直政朝臣は、中納言殿の第三の男、御母は、家の女房なり。(小田氏治の女)中納言殿、越前國を賜ひて、伏見の御館よりかどでし、入部し給ひし時、近江のうち、河内といふ所にて生れ給ひけれど、河内丸と名付、越前に入り給ひて、國松丸と改め、御寵愛淺からず。國松殿の十四歳の時、大阪の軍おこる。御母上、國松殿をちかづけまゐらせ、殿は、まさしき故中納言殿の御子、大御所の御孫にてわたらせ給ふ。栴檀は二葉よりかうばしとこそ承れ。弓矢取る家に、生れ、既に十歳にあまらせ給へば、今度、いかなる高名をもきはめて、大御所の御感に預らせ給へ。相かまへて、きたな

びれて、人にうしろゆび、なさゝれ給ひぞ。御父は、さる大將なれども、いやしきものゝはらにやどらせ給ひし故に、かゝる不覺もおれなどいはれ給はん事、口惜かるべき御事にさふらふぞや。自、いかに女なりとも、させる高名をもせさせ給はぬなど、傳へ聞き侍らむ、生て、再、逢ひまゐらすべしとも覺えず。と、泪とともにかきくどきて、軍の御裝どもかひ／＼しくとりしたゝめ、出したてまゐらす。慶長十九年十二月四日のあした、越前の軍勢、加賀の兵と先をあらそひて、眞田が城をせめし時、國松殿、眞先をかけ給ひ、天下に名をあげ給ひけり。

赤沼の鴛鴦

安積艮齋

夫婦は人倫の大綱にて、家の治亂は、婦人に由るなり。恩愛を厚くし、禮義を正しうし、偕老に至るべし。奥州田村郡赤沼と云ふ村あり。昔、此村に馬之丞といふ者あり。鷹を放つことを好む。一日、郊外に出しが、一禽を得ずして空く歸れり。赤沼と云ふ沼に、鴛鴦一雙居たり。弓を以て射たりけれど、其雄に中る。其夜、馬之丞の夢に、美婦人枕上に來りて、潸然として泣き居たり。怪みて問へど、昨日、赤沼に、誤りなき年頃の夫を殺し給へる悲に堪へずして來れり。此恩により、我身も長く此世に在るまじとて、一首の歌をそなへて去れり。

日くるればさそひし者を赤沼のまこも隱れの

獨寢ぞうき。馬之丞、哀に、不思議に思ふ程に、一日を經て、箙を見れど、鴛鴦の雌、腹を自啄にて突きつらぬきて死せり。馬之丞これを見て、感泣し、髮を剪て僧となれり。今に、馬之丞の子孫、赤沼村に在と。近年、風早權中納言實秋卿、碑を立て其事を記せり。羽鳥の微なるも、夫婦の情厚く、殉死せしは、哀なることなり。人は萬物の靈なるに、或は、妻の色衰へるを嫌ひ、新婦を迎ふるあり。或は、密夫をこしらへ、奔るもあり。此鴛鴦には遙に劣れり。先考、灌園先生云ふ。此事、著聞集に見えたり。又、西明寺時頼回國記に、下野國安蘇郡安蘇沼鴛鴦の歌あり。

日暮るれば、さそひし者をあそ沼の、ま菰かくれの獨寢ぞうき。此歌、赤沼鴦の歌と同じ。あか沼を、あそ沼とかはりしのみなり。能く考ふれば、不飽沼にあらでは來るまじ、あそ沼にては、歌の情味なし。左あれど、奥の赤沼は實證なるべし。

花ふゞき

塩井雨江

その九

軒の汐風、床の白露、さびしさは、おきふし毎なるもの丶いろの、今更に、おん衣にあまり、おん身にしみわたり、消えゆくむかりのおん心地にならせらるれど、一

の宮は、とみに、しとみを取りおろし、書さへ打ちおかれ、悵然としてながめ給ふ折から、三郎は、宮の召させ給ふときゝて、參りぬ。はるかにかしこまりたるを、近う招かれ、如何に、三郎。此の春よりの、一方ならぬ心寄せ、糸ならで、嬉しさは、繰かへして盡きじ。げに、思はざりけるたゝ住居。思はざりける人の情。いかならむ緣ありてかならむ。あやしき迄に、なつかしうおぼゆ。さはいへ、かばかり陰も岸も、頼まるゝがありながら、なは捨小舟、よるべもなげの覺束なきわが思ひ、親らが云はずとも、そこの雫は、汝も汲むらむ。いかにぞや、三郎。くみてなば、頼ましき事のある。

あな、かしこくも、うけたまはるものかな。かゝる名もなき草の野末に生れ、あやしき藁屑の邊に住み候三郎が身の、常には、しのびまつるだに、遙なる雲井の上のみ姿を、昨日けふ、まのあたり拜ぎ奉り、神ながらの御坐近う仕へまつる事のかしこさ。密に身を清め、心を拂ひ、罪なかれ、怠なかれとのみ、朝夕、ひたすら念に、思ひ侍りては候へど、身も心も數ならぬものゝ、必や、思ひ至らず、ゆきたらはぬはその、さはにこそ候はめ。いかならむおん事なりとも、仰せきけさせ給へかし。此

の三郎の身に叶ひたらむ限りは、御教への外を出でじと、かしこみてけいす。
宮は、靜に三郎を御覽じやられ、御坐の下まで、近う召させ給ひ、さても三郎、汝の思はんほども耻かしき、云ひがひなきわが身。越方をかへり見。行末を思ひわたせて、今ははや、わが世の中も、望たえたり。何處にまれ、いかにしてなれ、ともかくもならまほしう思ふものから、なほ、こゝろにかゝる方なきにあらず。一度は、ありつる都のあとをも尋ね、なつかしき隱岐のわたりをも訪ひ、塵とも、水泡とも、いづれか、はかなきわが世、はやも見はてまほしう思ふ心の、やみ難し。されぞや、三郎。汝に頼むといふは、われ此處に亡くなりにきときこえて、密に、わがゆく旅へ、出だし呉れよかし。ありてならば、汝を、人や咎めむ。亡くなりにきとあらば、何でう事のあるべき。いかにぞや、三郎。わが心を汲めと仰せて、かきあはせ給ふおん袖に、こぼるゝ一雫、露か、涙か、心づくしのけしきやな。
三郎は、ひれふしたるまゝ、暫時は、言の葉もあらず。沖には、やしほの亂るらむ。磯うつ波の音のみ、高くきこえしが。やがて、黒金なせる雨の手に、つぶらなる涙、幾度かうちはらひ。年來、都に遠く住みなれては候へど、君といふ事知らぬ三郎に

は候はず。兵馬の力にせめられ、止むなく、鎌倉の下知のまに〳〵、上は從ふとするも、下には、北條の無法、正さまほしく思ふなる三郎が心膽。密に、君がおん光をたのみ奉り、勤王の旗うちたてむかと、思ひ立ちたる事は、幾度も候へど、なまじなる戰して、よしなき敗せむ、三郎が、家も人も、そは惜しかるにあらねど、君のおん身の上の一大事とならむ事の、心もとなさに、思ひかへし候ふて、密に、大刀を磨き、鏃をとぎ候も、徒なる心には候はず。錦旗を揚ぐべき時津風、兵馬の肥え候はむ時を、待ち候のみなる三郎が衷情。今こそ、わかしたてまつるなれ。倘去ばし、汐やく浦の夕煙、苦しきおん世を、忍ばせたまへ。兵馬と共に、必、君を都に送り奉らむ。隱岐にも御供仕らむと言葉にも面にも匂ふ武士の赤き心、一の宮も、いかで嬉れしからぬ色に見させ給ふべき。三郎の手を取らせられ、かぎりなく悦び給ふものから、又、御息所のおん上、武文がことなど、おぼしわづらひ給ひて、おん思ひの、晴まなき、こゝもあはれは、はてもなき。

かなたにも、げに、いたはしきは、櫻姫のおん上。いとはしきは、賤機が事。わけても、かなしきは、武文が身の上なり。御息所は、怒濤の中に、捨てられ給ひてよ





り、唯、一人なる舟夫に助けられ、小舟と共に、浮きつ沈みつ、辛うじて、波間を凌ぎ僅に玉の緒をつなぎとめ給ひたる島根のおなじ岩がくれに、こも波にやうちあげられけむ、生体なき少女のありときくに、あはれさ堪へず、思はず走りよれど、こは如何に。思ひがけなや、ありつるは、衣も面も、まがふかたなき賤機。尼ヶ崎の岸に取りすがられ、かれあらでは、去らじいなじとまでに、いとはしみたまひたる賤機なり。げに、武文が命ともなりにたる最愛の賤機が、無慘の姿。

御息所は、弱りに弱りはて給ひたるみけしきも、とみに變り、あなやとばかり、抱きあげ給ひて、やよ賤機。櫻ぞ。のういとはしや、賤機。櫻ぞと、呼びつゞけ給へど、程たちにしか、いきかへすべきけしきなし。御息所は、涙にかきくれ給ひて、やよ賤機、聞えずや。ものいふてよ。きかせてよ。賤機と、よびつ泣きつ、唯、狂氣のやうに、見え給ふぞ、道理なる。

ありつる水夫は、さすがに、ものなれたり。さのみ呼び給ふとて、泣き給ふとて、叶はじ。水は、さばかりのみたるやうなければ、冷えたるにこそあらめ、斯くせられよといひて、頻に皮膚を摩擦りなど志けるに、なほ、給の緒糸の、よる方や殘りた

りけるにか。あるは、御息所のおん一筋のおん心の、達きたるにか、賤機は、幽に閉ぢたる目を開きぬ。あな、うれしや、賤機。かへりきて給へるか。櫻ぞ、賤機、心を強うせよと、幾度か呼び、幾度か水をもふくませ、忝かとおん身に抱きしめ給ひて、温め給へば、やがて、またく蘇生りて、あたりを、いぶかしげに、ながめたるが、姫上にてましますか、もつたいなやとばかり、おん膝をすべり、おん前にかしこみて泣く。御息所は、ふたゝび抱きあげ給ひて、親も、泣き給ふより、外を知り給はず。

それより、御息所は、尼ケ崎にて、小舟なりける人に欺かれ給ひける事より、此の島根にたゞよひ給へるまでを、荒〳〵物語り給ひて、武文の最期を歎き給へば、賤機は、また長者の屋敷の兵火を切り拔けむとしたる途に、思はずも捕られたる事より、父なる武文が臨終のほどにめぐりあひ、それより、大船のあとを慕ひて、何處までもと、漕ぎ出でたるが、馴れぬ舟わざの、思ふに任せず。大船は、いつしか見えずなり。忝かも、情なき怒濤、狂風、唯、舟べりに取りつき、眼を閉ぢたるまゝ、覺悟定めて、風波にまかしたるに、小舟は、はしなく物に打ちあたりて破れ、身も

共にうちつけられたりと思ひしが、其のあとを知らず。夢のごときふしぎの御介抱を賜はり、現ながらに、ま見え奉る事のうれしさなど物語り、わが身の不覺より、難義の上に、歎かけ奉りし事など、繰返して詫などし。又、ありつる水夫にむかひ、自、九死の淵に入り、御息所のみ命を救ひ出だしゝ心情を、あまたゝび悦びきこえなどすれば、その人は、いな上臈たちの御運の、めでかりけるが故と、ことはきて、かなたを見そなはせ、幽に火かげの見え候は、漁家にも候はむ。たよりて、疲をもやすめ、やつれをも整へ、後事をも圖り候はむ。いたく弱りてあれど、歩行は叶ふべうもおぼえねば、賤機どのは、親が脊負ひてまゐらせむ。姫上は、やつがれを杖にして、いざ給へとて、かひ〴〵しく、いたはりきこえつゝ、火影ある方を志して、漸〳〵にたどりつけど、岩かげに黒木をよせかけて、海草など編戸にしたるあやしの家なり。よしあしを厭ふべきにあらねど、門に入り、けふのしけに、破船したる旅人の、さすらへ來つるなり。一夜の宿をとて、おとなへば、しわがれたる翁嫗とおぼゆる聲して、けふのしけにあひたまひてか。さこそ難義ならめ。内も外も變りなき草の屋なれど、ほだの火あれど、いざ給へと、親、編戸をかひやりて、迎へたる

翁夫婦、よもぎの髮、霜既にふかく、身に纏ふ草衣、汐にや風にや、あせはてゝ、色もなく艶もなけれど、何となう訣床しきものいひ振舞、よしありげなる宿りかな。

一本萩

柴田千稲

其の二　相撲の催

花に心を浮されて霞の空に迷ひ出づる頃なれど、今日は尼御臺の仰にて相撲の御催のある日なれば、いつもの如く蹌踉蹣跚として木の下蔭に眠を貪る若者もなく、軟砂の上に頬杖をつきて醉顔を飛沫に撫でさする武者もなく、いでや茲ぞ一番日頃の力量の試時なりと、素袍の袖を打返して集まる者引もきらず、流石に目廣き庭の内も、人を以て埋められたるか如く、若きも老たるも鎌倉中の武士といふ武士は、土俵を廻りて隙間もなく居並びたり。

打廻らしたる笹龍膽の白き幔幕は緩やかなる春風に舞はれて時に靜に其裾を引き、絲遊の流は長閑なる日の光に閃きて鳥は窈窕の音を弄び、空を覆ひたる櫻の梢より

折々亂れ來る落英は二辨三辨、數辨相重りて土俵の上を雪の如く彩れり。其正面には將軍、尼御臺、御臺所の御座所を搆へ、北條一族より和田三浦の老臣等は星の如くに其末に續けり。御臺所は日頃憂に閉されて御而地も優れたまはねど、側に見る目も御憫はしく御いとほしく、松島局は如何にもして其御胸を晴らしまつり其御心を慰めまつらんと思ふ折からなれば、進み給はぬを強て勸めまつりて、漸く出でさせ給ふ事となれり。許多の局女房達は雀躍して喜び合ひ、各押合ひて御覽の座へ列れど、鮮やかなる伊豫簾を漏れて妖艶の花の匂の誘はれ來り、霞を隔てゝ桃李の裝ひゆかしく、翠髮美はしく垂れて錦の文は五色の彩雲のおりて擁れるが如し。

暫く程經て、此靜に沈みたる空氣を破りて鼕々たる太皷の音は轟き渡りぬ。居並びたる武士共は腕を膝に組てゝ居坐を正しうせり。やがて其幕を開きて稜々たる肩を搖がし、顯れ來りたる二十余人の若者あり、西と東とに別れて土俵の側の弧の上に巖の如き腰を載せたり。彼等は日頃より力量の優れたるを自も誇り人にも知られたる者共なれど、鐵を堅めて鑄上げたるが如く見ゆる黒く逞しげなる者、幾歲か經た

りけんと思はるゝ松の幹の如き太き強き者、或は仁王の怒りたるが如き、或は夜叉の睥睨したるが如き、或は阿修羅王の呻きたるが如き者、腕を撫でゝ四邊を睨まへつゝ居並び居る。

かゝる内に再び太皷の音は天を驚かして響き渡りぬ。行司は立上りぬ。烏帽子の紐を結びさげ直垂の袖をまくり上げて裾を高く括り、團扇を捧げて兩足を斜に踏み張り、力士を登り來るべく麾きぬ。

西と東とに座りたる力士は大地を蹈鳴らして立上り、兩々相雙びて正面の方へ向つて恭しく禮拜をなし、互に爽らかなる聲を上げて其姓名を名乘れり。

かくて引退きて又西と東とに別れ、便々たる其腹を撫でおろして相向ひぬ。其腹の底より揉み出したるが如き聲を走らせて虹の如き氣を吐きつゝ睨まへ合へり。座の上段より下段に至るまで居並びたる武士の凡ては、各眼を見張りて息をもつかす。數百の視線は齊く此兩人の鼻の頭に集まりけり。

やがて一聲高く叫びて行司の團扇の閃くと見る內、奔電の如くに飛びて彼等は引組み、蚩々聲を上げて大額に汗を迸らし、滿身の勇力を揮ひ起して右に揉み左に格せ

り。
暫らくして砂の驟雨のバサ〳〵と落ち來ると思ふ内、一人の大の男は地響うつて仰向樣に倒れ伏したり。東の方は遂に勝となれり。見物の多くは思はず聲を擧げて賞めそやし暫は鳴もやまざりき。

かくて二番三番互に組みて遂に八番に至りぬ。然れども如何にしたりけん。西の方は常に土俵の外に投げ出されて、僅に一人の勝を得たる者もなかりき。是に依り東の方は得々たる鼻を蠢めかして嘲り笑へた、西の方の者は滂沱たる汗を拭ひもあへず、切齒して無念の涙を揮へり。

弱き者を憐みて勝誇りたるを憎むは人の情なり。かく幾度も組みて幾度も打負けて、腕を扼して無念の涙を揮ふを見れバ、如何にもして勝せたしと願ふは世の常の人の心なり。まして感情深き婦女の心は無殘なる敗北の西の方を憐むの感に打たれ、皆均しく其輕き口をも鉗みて頻りに其膝を進ませつゝ、仝情の眼を注いで覺えず西の方のみを打護る、御臺所も不愍の事なりと思しけん。松島の局も又しか思ひけん。一人として聲を發する者なく、寂として只折々衣のすれ合ふ音のみぞ聞ゆる。

やがて愈々八番の取組となれり。東の方よりは如何なる者や出らん。西の方よりは如何なる猛者や表れん。此度の勝負は如何あらんと、武士等は皆挙を握り固めて土俵の中心に其眼を放たざりけり。

暫く程經て、西の方の前に並びたる者共を分けて、静に土俵際に登り來りたる者あり。彼は年未だ若くして紅顔に威を帯び、臥蠶の眉は恰も漆の如くに黒くして、静に揺ぎ行く肌體は堅くしまりて清き事さながら絹を張りたらんが如し。やがて彼は恭しく正面に拜伏して謹んで朝比奈三郎義秀と名乘れり。

朝比奈とは兼て聞及ぶ巴御前の生みたる子にして、母の性と父和田義盛の勇畧とを受けて、勇は膳臣巴提使の如く、力は野見宿彌に劣らず。鼎をも易々と拉ぐるばかりの天晴無双の若者なりとの噂は大奥にも及びし程なれば、局女房共は肩より落したる大息をなして初めて重荷を卸したらんが如き心地しつ、口の邊りには頼もしげなる微笑を湛へぬ。

かくて義秀は二度三度其腕を撫でおろして蹠を踏み鳴らし、徐ろに其腰をかゞめて待てり。數百の視線は其一身に集まり數百の眼は其一體に向へり。かくする内、東

の方よりして石臼の動き出したる如くに搖き寄るものあり。彼が顔は鐵の板の如くにして筋骨堅く太く、北條の麾下に左る者ありと知られたる日下八郎といふ者なり。やがて双方立寄りて體を崩さずして相睨み、其身をじり〳〵と進ましめて互に其虚を計りぬ。恰も猛虎の巨巖の傍に身を潜て、仇を狙ふが如く、見る物は勝負は何れにあらんかと唾を呑みて手に汗を握り、春の氷を踏むが如き心地をなしつ打護れり。かくて雷の如き一喝天上より落ちて双方ひしと相組み、土俵の上に散りたる落英を再び空に捲き上げて、朦々たる雨か霰か又烟の如き中に、必死となりて二度迄かり揉み合しが、忽然、四本の柱の躍り倒るゝかと疑はれて一人は物の見事に投げ出されたり。日下は鼻の元に百筋千筋の皺を集めて腰の痛をさすりつゝ、平太張伏したる儘暫しは起きも得あがらざりき。是に依り、海嘯の岩に摧けたるか如き歡呼の聲は何處ともなく湧き、西の方の者等は諸手を打つて躍り上りつゝ抃舞し、喜極りて涙を浮ぶる者もありき。御臺所も思はず微笑を浮べさせ給ひたりき。
續いて東の方よりは數人の力士の躍り出たれど、皆前の如くに投げ出され摑み出され、黒髯に波を打したる大の男も全身泥に塗れて恰も壓潰されたる蟹の如く又小石

の轉ぶが如く、白き泡さへ吹きて這々の体に逃げ込む樣は、前に嘲弄の舌を翻へしたる強者とは見えざりけり。

義英は尚も敵の出るを待ちて其土俵の眞中に起てり。其烱々たる兩眼は夜天の北斗の如くに輝きて、髻を解けたる黒漆の髮の毛は婆娑として兩の肩に亂れ、折々散り來る梢頭の花は、翩々として其淸き體を掠めて落ちぬ。

かくの如くにして最早我と名乘りて躍り出るものあらず。東の方の初の勝利は忽ちに變じて將に大敗の內に終らんとす。義英は止むことを得ずして會釋して其塲を引退らんとする時しも、座の一方より大喝一聲恰も鑼を打鳴らしたるが如き聲の響き來りて、待て朝比奈、相手致さうぞ。其處一寸も罷り退くなと云ふま丶、ヒラリと中庭に飛びおりたる者あり。萬衆頭を返して何者なるかと見れバ、兼て北條の一族として剛慢の名高き北條四郎時定といふ者なり。猩々の如き赭き顏を怒の爲に一層赤くなし、蹲踞りたる巖の如き鼻に風を起して、髭々たる鬼髯を揮ひ起て、手早く衣服を脱ぎ棄て丶會釋も施さずに躍り出で、やがて爛々たる眼に義英を睥睨して、いざ來よ朝比奈、勝誇りたる鼻柱に泥を塗らぬ用心をして來よと、勃々たる力量を

山の如く堅き腕に集めて獅子の怒りたるが如くに飛びかゝらんとすれど、義英は其言葉を耳にもかけず淡然として相對ふ。抑如何なる奇劇の演せられんとするか、人は皆肩を聳やかし肱を羽翼の如くに張りて、恰も我身の相向ひ相組むが如き心地して何となく呼吸の切迫し來るを覺ゆ。

やがて一聲高く叫びて二勇士の立上ると見れば、二度三度土俵の砂は風と吹き雨と降り、金龍の八百重の黒雲を捲きて洪風迸り、猛虎砂礫を蹴りて颷風噪ぐが如く、必死の掛聲のみ朦乎たる中に響きて、左右何れが何れなりとも別ち難く、見物の武士等は恰も醉はされたるが如くに茫々として夢中を辿る內、俄然暗雲の頭の上に落ちかゝりて我身の包まれたるが如きの感を覺ぬ、アハヤと驚き迷ふ瞬間、曳たる一聲耳を劈きて我體も搖ぐるゝばかりの地響をなさせて飛び來る者あり。思はず首を縮め眼を据ゑてつら〳〵眺むれば、アハレ北條の體は巨巖の絶壁をはねられたるが如く、もんどり打つて二間ばかり先に撞と轉び、朝比奈は平然として土俵の上に起ち居たり。坤軸も折るゝばかりの喝采の聲は起りぬ。四邊は恰も鼎の湧くが如くに囂々たり。北條は無念の眦を抉して圓なる兩眼に血を走らせ、人に助けられて悄々〳

に其場を立去れり。かくて今日の相撲は終りぬ、勝ちたる者は將軍の御前より衣裳或は太刀などを賜はり、面目を施して引退れり。居並びたる武士等も已がじゝ立歸り行けり。跡は嵐の鎭まりたるが如く、夕日の光の花の色を浸して長閑かに靡くあるのみ。

文林

曉霞　東久世通禧

鐘のおとは近くきこえて春がすみ
　たちこそそむれ明かたのそら

窓前鶯　鍋島直大

朝おきて庭ながめむとまどの戸を
　ひらくと共にうぐひすの鳴く

折梅　津輕承昭

咎むべき人もあらねど野つかさに
　かをれる梅ををりてゆかまし

竹裡鶯　前田利昭

きりとらむ笛にもならむくれ竹に
　節おもしろくうぐひすの鳴く

溪梅　水野忠敬
梅が香のかをれる方をとめくれバ
はるまださむき溪のかけみち

見梅　長岡護美
白たへの袖かと見えてかすむなり
わか菜つむ野の梅のはつはな

新年鶴　諏訪忠元
新らしく年たつ今朝はゆたかにも
千代田の宮にたづぞまふなる

庭梅　坂正臣
わがやどの庭せむけれバ梅のはな
いよいよたかく香に匂ひつゝ

社頭鶯　植松有經
うぐひすの初音を聞つうぶすなの
田なかの杜におさまうでして

新年待鶯　平塚睢鳩
年たゝばこむとちぎりし人よりも
まちいそがるゝうぐひすの聲

一月一日によめる　三輪義方
庭つ鳥わけつぐる音におきいでゝ
汲むわかみづに星のかげ見ゆ

若水　高田顯允
いたづらに年をかさねてわか水の
かゞみにうつる影もはづかし

早春川　石丸忠胤
今朝よりはこほりとけゆく音羽川
ながるゝ水もはるをえるらむ

新年竹　酒井喜雄

あら玉の年たつ今日はまどのとの
をざゝの音もきのふにはにず
岸竹子　佐々　豊水

若松のおは城のうへによろづ代も
ふし高くこそ名はのこりけれ
題不知　松本　道別

いふもうくいはぬもつらし村肝の
こゝろひとつをいかに忍ばむ
松上鶯　鍋島　榮子

いく春もかはらぬいろの松が枝に
千代の聲してうぐひすの鳴く
旅中鶯　柳原　愛子

家にあるこゝちこそすれ旅やかた
なくうぐひすの聲をきく日は

梅盛　松平　健子
おしなべて梅のさかりに成ぬらむ
風のかをらぬさとしなけれど

隣梅　小池　道子
うぐひすの聲もきこえてあし垣の
となりの梅のはな咲きにけり

寄松祝　何　たに子
あらたまの年をかさねてひめ松の
榮ゆるいろを見るぞたのしき

新年友　安東　菊子
親しきもうときもとひて呉たけの
よにうれしきは年のはきごと

若菜　尾崎　すう子
おりたちて根芹つみけり老の身も

こゝろばかりを若菜にはして

初春松　園生　鶴子

子の日する人のこゝろの若みどり
手にとる松のいろに見えけり

晴天鶴　橋本　丹江

しらたづの聲すみのぼるおほみ空
かぎりなきまで晴れ渡りけり

立春　河野　文子

身にそふる老もわすれて春たつと
いふばかりだに閑けかりけり

鶯をよめる歌　海上　壽子

高麗劍　吾家の園に　梅の花　かをれるなべに　いくみ竹　葉がへぬなべに　鶯も　こゝにぞ來つる　あしたには　梅にこづたひ　ゆふべには　竹にうつろひ　おもしろく　ねなきとよもす　其聲を　ききつゝをれば　世の中の　うさもわすれて　たぬしくもあるか、

埋火　下田　義天類

世に埋火ばかり、ゆかしく、なつかしき物はあらじ。さるは、かき起す心のともなど、たのもしき方の、このみにはあらねど、世にひかりなき身は、ふみ見る窓とても、あたゝかにしもしつらひがたきを、狐なくさむきよすがら、おこたりなく、我が身をなぐさむるものは、この埋火なればなりけり。されど、炬燵といふ物は、おほひたる蒲團の所なく立ちはばかりて憎きに、倚りそふ人の立居

ものうげにするなど、うづみ火の咎にはあらざめれど、心づきなし。すこし、膝さしいだしたるに、ねぶれる猫の、そのさきにふれたるなどは、殊に、ひくつけしかし。霜のあした、雪の夕、常に、我が身に伴なふ火桶は、桐のまる胴に、あかゞねのおとし入れたるものなれど、能くふでとる手さきをあたゝめ、あるときは、筑紫綿のうすきをおぎなひ、また、あるときは、やれふすまのたらはぬ夕を、なぐさむる事さへあり。かゝれど、年ごとに身ぢかくならせど、功にはほこらず。恩になれず。こよひも、また、まめ〱しく、ふづくゑのかたへにさもらひたり。かしらの、やゝ、しろくなれるは、われにつかへて老いたるにかと、すこし、かきおこさむとするに、木の芽にてきこしめせど、

そゝのかしがほに、ゆわかしの音たてたるも、うれしく、たのもしくなむ。抑、この埋火と、いふものよ。黄金の火桶、玉のすびつに、さくら炭あたたかげにさしたて、化粧ばひの上に、枝炭めやすきほどさしはやして、そらだきくゆらすまどの内に、しろかねの鼎をあたゝむるもありとか。さる耳遠き事は、わが身にふさはしからねど、こゝにはいはず。今の世に、もちゐらるゝ、ストーブとかいふものも、家のしつらひ、わが身のおよびなきものなれど、しらず。青銅に金銀の象眼して、錦のしとねにかしづかれたる、花がた、すかし堀の、しゆうろは、常には、二頭だての馬車にのりて、ときめくときけど、炭櫃ひとつを中にうづめて、わび人の、またぐらにけがさるゝ、だき火

鉢もありとか。されば、その品よ、さゞみ〳〵はいとおほかめれど、たかきにゐても、まばゆき光をはなたむともあせらず。ひくきにおきても、おだやかに、あたゝむる徳をうしなはぬものは、このうづみびなるべし。世にうづもれたる身には、ひとしほ、ゆかしく、なつかしき物におもひなさるゝも、わりなきおもひにこそ。

雪後眺望

横井知萬多

塵ふきまはし、昨日の風の音たえて、匂ひし梅の花も見えず。歳寒くして操いよ〳〵しるき常盤の松の緑もわかず。金銀珠玉を鏤めし高殿も、さきを揃へぬ茅の伏屋も同じ色に、瓦の黒きもなく、霰たばしる板屋の様もなし。地の面はたひらに、いと清くいと美はしく、白きもの粧ひたる姿とはなりぬ。これなむ夜の間に雪のふり積りし様なる。いつしか朝日のさしのぼれは、雲はやう〳〵晴れわたりて、空は磨きあげし鏡の如くなるに、きよく美はしきこの姿もうつりぬべし。小鳥の飛びかふ羽風に、雪はちりて香のこぼれくるにて、梅の花とはしられ、今朝のみは色もはえある烏のなきつれて、住家もとむるもあはれに、雪かき散して緑の木葉ふみ出されたるなど、中々にめづらしくうれし。伏屋には朝食の烟雪よりたち、高殿にはめではやすらむ。はや物の音ぞきこゆなる。有らゆる何くれの物、表べの姿さながら深く蔽ひつゝまれても、遂につゝみあへぬは、内なる心のありし儘なればなるべし。目は近き方より遠き方に及

び、遂に朝な朝な親にまみゆる心地してながむなる富士の高嶺にうつりぬ。世はなべて雪となれるを、今更なりやといふさまして、三千年の昔より、塵をよそに雪井高く聳ゆるは、げにけふもこの上に出るものなかりけり。高嶺の心よ。けふのみは世の中なべてわれにまつろへり。われに倣ひたりとて喜びてやわらむ。さるにても河の流、海原の波のさりげもなく去らぬ顔なるをぞ、いかに憎しともおもふらむかし。

葉ざくら草紙序

松本道別

人みなは、秋の木草の、うらがれゆくを、あはれのかぎりにはいふめれど、暮れゆく春のなごりの、葉ざくらこそ、今、ひときは、身にしみて、あはれ深けれ。佐保姫のおりなせる霞のたもともれて、百千鳥なくねのどけき春の光に、うら〳〵とさきいでたる花のさかりは、かしこの野山、こゝの園生と、うはさとり〴〵に、人のあくかれゆけど、心あわたゞしくて、けふやゆかむ。あすやとはましと、誰、かれ、かたらふまに、雨か。嵐か。思ひきや、一夜のうちに、名残なうちりはてて、白雲地におち、梢、たゞ、葉ざくらの世とならむとは。あゝ、こを見て、たれか、無情のうらみなからむやは。人のうへ、また、しかり。六十路の露、きえがたにおよびたる嫗の、珠數といふものつまぐりて、み寺まうでする姿の、たど〳〵しくて、哀ならぬにはあらねど、猶、かたちうるはしく、ときめける

女の、子といふものもちては、世のおぼえもおとろへたるが、ふところ子に、ちぶさふくめて、あやしき節に、こもり歌うたふさまの、色香うすく、やつ／＼しきなむ、あはれ、こよなうはべる。わが友、小栗磯夫ぬしは、花をひんし、柳をひやうする、風流のをのこなり。雪のあした、月のよは、興いたれど、ほく、はいかいに懐をやり、また、このみて、小説ちふものをつくる。このごろ、世をはかなむことありて、都の、ちりの街の、けがしきをいとひ、ふる里、をはり、はん田にかへりて、衣が浦のきよき渚に、心あらはんとて、立つにのぞみ、一まきの書を、われによせたり。題して、葉ざくら草紙といふ。葉櫻のうらみある、をみなのうへ、寫したるにぞあなる。艶なるふで、優なるふみもて、あはれ深う、かきあせりしなれど、よみて、涙なきものは、人にあらじともいひつべし。これたび、板にゑりて、世におほやけにするにつき、いさゝか、ことのよしを、かくは物しつるになむ。

雜報

●皇后宮陛下の御恩賜　皇后宮陛下には、今回の遠征に從ひて、傷つき、あるは、つよき寒氣にをかされて、手足を失ふものを、不憫に思召し、厚き深き大御心もて、これらの者に、御手許金にて、

義手、義脚を作らせて賜ふ旨、おほせ出させ給ひたり。遠征の將士卒、このよしを聞かば、たれか、天恩の優渥なるを、感戴しまつらざらむ。

●本年月並御歌會の兼題　毎月、宮中にて御執行ある、月並御歌會の兼題は、左の如く、仰せ出されたり。

一月　鶯在谷　　二月　餘寒月
紀元節　都春風　　三月　大伴家持
四月　曉山櫻　　五月　ねざめのほとゝぎす
六月　朝早苗　　七月　伊賀局
八月　離朝顔　　九月　雁初來
十月　きくのはなつゆふかし　　天長節　連峯紅葉
十一月　遊船所　　十二月　山家如春

但、御會日は毎月五日（一月は二十五日）

●小蘋女史の名譽　華族女學校の囑托教師、女畫伯の野口小蘋女史が妙筆になれる野州鹽原の畫は、格龍大博覽會にて、大に、彼の國人の好評を得、同會より、賞狀を贈りこしたるより、鹽原の住人、藤原の九兵衛何某とかいふ人は、女史が妙筆にて、我が鹽原の名の、外國まで知れわたりたりとて、喜悅のあまり、左の歌を、女史のもとへ送りこしたりといふ。

わふぐらしとつ國びとも鹽原の
　かくばかりなる君がほまれを

歌はともかくも、女史の名譽、大なりといひつべし。

●貞女の自害　霧ふ砲烟、霰とふる彈丸を凌ぎて、言さやぐ支那の奴らを打ちきたため、切り拂ら

らひ、あはれ目ざましき働して、遂に、敢果なく、鳳凰城頭の露と消えにし、故陸軍中尉淺田丹治氏の夫人は、ゑん子といひて、今年廿の坂を一つこしたるなり。

父は陸軍少佐岡見政美の君にして、今より二年以前に、中尉に嫁ぎ、枝を連ね、翼を交ふるの契深く、千代も八千代もかはらじと、かたらひしに、花を妬む雨風は免れがたき、浮世の敢果なさよ。唐夷 妄に高麗の荒野を騒がしゝより、征討の大詔下りて、中尉は、兼て 大君に捧げまつりし此の命、御國に盡す好機は今なるぞと、戎衣のいでたち勇ましく、佩劍もゆらに振り鳴らして、さらばと許にて出立ちぬ。ゑん子は、武人の軍に向ふ上は、討死は覺悟の前にて、またの逢瀬は期りがたし、是が限の離別かと、思へば、身もよもあらぬ悲しさに、せきくる涙を、めでたき門出に不吉と叱られじと、よそに紛らして、目出度凱陣を待ちますると、いひしが精一杯なりき。さて、中尉渡韓の後は、孤閨の燈暗く、夢冷かにて、雨につけ、風につけ、良人の上を思ひやり、唐の荒野は雪深み、結びて枕かむ草だになからし。如何に暮しておはすらん。敵に、な傷つき給ひぞ。寒さに、な犯され給ひぞ。あはれ、無事に比類なき勳功して、目出度凱旋あれかしと、神や佛に祈願かけ、頼みし事も、うたかたの消えて敢果なく、不知ぬ彼の國鳳凰城頭の、露となりしこそ悲しけれ。兼て覺悟はゑながらも、亦、今更のやうに想はれて、憂さには堪へぬ涙とゞめ難く、玉の緒の、

絶えなば絶えよとばかり、泣き悲しひけるが、一死もて君に報い、國に盡し、良人の御魂にも恥かしやと、やう〳〵心とり直して、涙ににじむ薄墨の、跡もあはれに消息かきて、良人の郷里なる宮城縣金山の、舅か家に送りて、討死のよしを知らせぬ。かくと聞きて、舅は、物もとりあへず丸亀に來り、ちん子に逢ひて、中尉の上を語りいで、はさぬ袖をぞ絞りける。さて、舅は、後の事どもとり納めて、金山に歸りしかば、ちん子は、もはや、是にて心殘りなし。良人うせにしに、獨後りて何かせむ。戀しき人の後追ひて、共に夜見路をたどらむやと、心靜に、家の内外をとりをさめ、親舅、其のほか、親しき方へは遺書を殘して、去年のしはす二十六日の夜、良人の寫眞の前に端坐し父少佐が、たしなみにとて給ひし懷刀もて、咽喉に突きたて、惜しや、風なきに花の盛を散しける。あはれなりける事どもなり。

●呉竹の操　女鑑第六十七號に、孝女竹子が、賞與を受けし由を記載せしが、右は、愛知縣のものなるを、靜岡縣としたるは誤なれば、是に正す。倘、御歌所の大口鯛二氏より、竹子に送りし歌なりといふを得たれば左に掲ぐ。

おやのためうきふし忍ぶ呉竹の
　みさをは世にぞあらはれにける

●學園につき注意　今回より掲載する學園は、號を追うて續くなれば、便もて、卷の末に載せ、完結の後、一卷の書に綴ることを得るやうになす。倘、完結の上は、表紙を色摺にして進じまゐらす

べし。

●似非博士論　春の朝、秋の夕、外山のたゝずまひをかしき本郷臺の赤門に、久しき博士あり。何事も時の流行におくれぬ才男にて、耶蘇教はやれど、アーメンを唱へ、西洋風のさかれば、歐化主義をいひ、新体詩といふもの行はるれば、怪しき七五調を並べ、朗讀法をいふものあれば、假聲めきたる眞似す。この博士、斯邊査とかいふ夷人の學說を奉じて、そが總合哲學と、社會學を、十年以來講ずるといふ程の男なれど、元來、西洋風が好にて、男女交際、自由結婚、男女同權などいふ事は、痛く望む所なり。さるに、一たび、達識人士の國體主義を唱へいだしてより、今まで、歐化の魔風に迷はされて、夢幻のごとく、狂ひ踊りし男も女も、さながら、醒が井の水吸みしが如くに、眠のさめはて、西洋風は、さし登る朝日影に宇治の川霧消えゆく如くなりけれど、流石、西洋好の博士も、遺憾しき事に思ひながら、しばらく、蝙蝠の羽翼をさめて、時を伺ひける。されど、日本魂、國体主義は、その古に復りて、愈々さかり、照りはたゝく日の御影は、まぢゆき許なれば、蝙蝠の翅るべき時なむなかりけるより、博士さまざまにあんじて、遂に、我が古典をかいのぞき、この假面もて、彼の國風を、ふたゝび、御國にうつさむとぞはかりける。そは、博士が、この頃、ある雜誌に掲げつる、神代の女性ちふ文にて知られたり。

（未完）

教の庭

一月五日兼題　寄松祝

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　長野縣下水内郡　高野辰子

二葉よりしもはおけども色かへぬ
まつや御國のすがたなるらむ

地　長野縣長野町　田邊貞子

五百枝さすかみがき山のおい松は
はごとに君が千代やこむらん

人　神奈川縣三浦郡　木下本子

とことはに色もかはらず榮えゆく
松こそ御代のすがたなりけれ

安井章子

おほ御代の姿なりけりとことはに
みどりさやけきこゝのへの松

住山幾子

大君の御代は八千代ととがへりの
まつもさかゆく代を祝ふなり

住山せの子

萬代をかぞへんものはときは木の
まつにそよふく風のこゑかな

住山靜子

仰ぎても變らぬ御代はしられけり
高ねに生ふるまつのみどりに

溝口直子

敷島のうらのまつが枝おとすなり
をさまる御代の波もしづかに

神田春子

千代よろづかはらぬ色のには松は
君をことほぐしるしなるらん

西村菊子

君がよにみどりいやますには松は
いくよかけても變らざりけり

西村とら子

動きなき御世のためしと松こそは
みやまの奥に千代もへぬらめ

常盤なる松のみどりのきみが代は　磯野たま子
いく千世ふとも變らざりけり

みどりそふ老木の松にたよりきて　羽田玉緒子
たづも巣籠る御世ぞめでたき

君がよとときはの松はゝろともに　羽田千世子
みどり添つゝよろづ世やへん

君が世はいはほに根さす松の木の　橋本丹江子
千よろづまでも榮ゑゆくらむ

千歳へむ松をひさしとおもひしは　千賀しげ子
君が代しらぬこゝろなりけり

限なき御代のさかえにくらぶれば　師岡千代子
松の千とせはふた葉なりけり

さかえ行く御代のしるしと年毎に　吉田　芳子
みどりいろそふときはの松かな

ものごとに今朝は新に見ゆれども　谷　ゑい子
しるきは松のみどりなりけり

春ごとにみどりくはゝる松が枝に　永井仙十子
さかゆく君が千代ぞこもれる

色かへぬ常盤を御代になぞらへて　馬島久仁子
千とせことほくきゝのおい松

ときは山ときはの松のふかみどり　淺井　圓子
色もかはらぬ御世ぞのどけき

十がへりの松のみどりも色はえて　田中りん子
君が御代をぞいはひがほなる

君が代のかぎりなきをや祝ふらん　平野きみ子
みどりもふかきみそのふの松

御園生の松のみどりのいろに出て　龜井しげ子
きみが八千代を禱るけふかな

年ごとにみどりいろそふ松が枝の　梅原ふで子
ときはかきはに御代は榮ゑん

幾千世もかはらぬ色をたかさごの　白石　藤子
松のみさをにかけていはゝん

なずらへて幾よろづ世も榮ゑよと　松本のぶ子
君が代いはふ和歌のうらまつ

大君の千代のさかゑの色みえて　磯野つや子
みどりたちそふろの丶松が枝

老松のかげに小まつのある見れば　遊佐とよ子
御代は千代とも限らざりけり

ながき代のためしに引し御しめ縄　落合　操子
くちても松はかはらざりけり

千歳をバ君にさゝげて大御代に　河野　文子
松はいくたび生ひかはるらん

動きなきおほうちやまの松が枝と　降田　槙子
ともにさかゆく君が御代かな

苔むせるいはほの松にはなさくは　村田美都子
千代へむ君がためしなるらん

常盤なる松も千歳のかぎりあれど　村田喜代子
あかねこゝろに君はへぬらん

かぎりなき君がよはひは中々に　松尾ます子
千とせの松もくらぶべしやは

大君のつきせぬ御代に生ひたてど　浪花のぶ子
千とせの松もよろづ世やへん

ひさしのに千代もといはふ姫小松　小町谷里江子
みさを正しきいろぞみえける

門ごとにいはひてたてる松が枝に　佐々有鄰子
榮ゆく代のいろもみえけり

きみが代のほどもおもへど住吉に　梶井　仲子
こけむす松のちよはものかは

幾千代もときはかきはに榮ゆく　梶井　久子
松こそ御世のすがたなりけれ

君が世のめぐみの露にからさきの　大海原芳子
松もうれしきいろや見すらん

我が園のみどりかはらぬ常磐木は　木村　政子
君が代かけて千代ちぎるらん

春ごとにみどりくはゝる松が枝は　永井さい子
さかゆく君が千代やこもらむ

うごきなき御代のすがたは山松の　横山きみ子
かはらぬ色ぞためしなりける

春ごとにみどりいろます松が枝は　檜村美世子
榮ゆく御代のためしなるらん

とことはによはひ久しきおい松は　大谷　友子
君が千代ほぐすがたなるらむ

うごきなきいは根の松の枝ごとに　畠山千代子
君がへぬべき千代ぞこもれる

植しめし松もときはのいろそひて　木村千代子
千歳をならす田子のうらかせ

朝日さすおほ城の松のふかみどり　堀江　鈴子
かはらぬ御代の春のいろかな

高砂のをのへの松に千代八千代　大橋てい子
かたろふたづの聲きこゆなり

千代やちよ變らぬ御代のかげ見えぬ　久保田りつ子
おほうちやまにしげるおい松

かぎりなき御代のさかえを山松の　植木　鋼子
ときはの色によそへてぞ見る

かぎりなく變らぬものは君が代と　桂　慶子
ときはの松のみどりなりけり

住よしの松のひさしきよはひこそ　伊東志満子
やがて御國のすがたなるらめ

一月五日兼題　貴賤迎春

天　大坂市北區相生町　梶井　久子

玉をのべたる御あたりも藪をしとねの草の家もしなこそかはれひとしく皆これ御國の人いかでその心にへだてあらんやいと事しげかりし年は行水に流しやりて高きいやしきおしなべて今日しも天津

日かげの曇りもなく四方の海の浪おだやかに風さへいとも靜かなる明治廿年あまりやとせの春をこそ迎へつれかの見ゆる東の山よ雪はなほありながらかすみそめたるけはひの何となくのどかなるに心早き梅のふたつみつ蕾をさそひがほなるも實に春のしるしとぞおぼゆる朝日にかゞやく日の御はたにも軒端にかざる松が枝にも共に大御代のすがたみえていとゆたかけくそらだきのかをりゆかしく綾にしきにまとはれたまふ御方々もぬのこにかたをいからす里の童も皆それ〳〵にとりつくろひたる今日の心こそまことにへだてなくめでたけれあはれかしこくもあふぎたてまつれバわが　大君は去年の秋よりひろしまへいでまして夜嵐寒き大本營にこの年をむかへさせたまひきさいの宮にもことをかしこみたまひて九重の内の御儀式をやめさせたまふなど申すも中々おそれ多きことにこそとりわけ征淸の軍人たちはほこをまくらの旅のそらなれバ屠蘇などはさらにもいはず鏡餅だにあらざめりされバ何をかしるしにはすらん「ふじのねの

朝日あふぎてから山にわかものゝふや春をしるらんわすをべしらぬ身なりともなどおもひつゞけらるかく上大將より下萬卒にいたるまで雪を凌ぎ雨ををかして遠きさかひにあるをおもひてやことしは屠蘇に醉ひしれて大路をよろぼひ歩く賀客を見ずつかさ高き人より兵卒にいたるまで禮服といふものをつけずさう〲しきやうなれどいと勇まし大君のあつき御惠は申すもかしこしかくこと〲に心をくだきて御國の爲につくさせたまふゆゑをもてかずにもあらぬはにふの小屋のおのれらまでもいとゆたかなる春をむかへて初日の御ひかりををろがみまつる事を得たるぞいとうれしきや

地　　長野縣長野町　吉田芳子

花をあはれみ月をめづる心は貴賤のへだてなく貧富の別に因ていたく異ならむされど新玉の年立ちかへりのどけき春を迎ふる喜は皆同じかるべしさるはさえぐらしたる去年の名殘も晴れ渡りうら〱と曇りなき春の光に日やむごとなき雲の上は更なりあやしき山がつに至るまで門毎に松竹のみどりを立てならへ君が御代をことほぎのどけき春を祝はざるものやなからむされば人の心もおのづからのひらかに鶯の初音などまちわぶるは都と鄙と同じく老も少きも異ならざるべしあはれ位山高ねにたなびき初むる霞を見ばふもとの民草も後れずもえ出づべく山里の雪間に咲ける梅の匂には都の巷の柳も爭ひて打ふるらむかし

人　　本郷淺賀町　落合操子

世ははや春とはいへども我すむ里は雪まだふかし老いたる母もましませば祝ひのしるしに若菜にてもつみきてまゐらせむと籠を手にして庭におり立つ折しも門の外に車のとまれる音すたれならむと見ればいとやむごとなき人の乘り給へるなり禮服などつけさせ給へるは朝賀など終へて御別莊などにかえらせ給ふにや扇してまねがせ給ひしかばそなたざまに近づきしにかき根の梅を指ざしてわれ一枝とらせよとの給ふやすき事とて折りてまゐらせたるに

賤がやのかきねの梅も大君の

御代の春にはもれぬなりけり

と誦じ給へりまことと春はたふとき家にのみは來るならずとおもふに賤かこの身も俄に春にあひたる心地せられてなんあはれこのよろこびそく／＼母にきこえまつらむかの若菜などはその後にてもこそ

熊木　篤子

年月は流るゝ水にひとしく廿七年も夢の間に過ぎ去り若水くむ井車の音もわきて清らかにあにつきゑらす鷄の八聲と共に二十あまり八かへりの春とぞなりにけるされど四方の山邊もうらゝかに初霞たちこめて空ふく風ものどかなり見わたせば軒ごとに打ひるがへる日の御旗は千門萬戸にかざり裝へる門松のみどりと共にさし昇る朝日に照らされてかゞやけりゆきこふ人々の心もおのづからに見えてうきことなげに打ふるまひ況してはかなきわらべどもの遊びわざに戯むれかはすもいひしらずおもしろしげに年立かへる春のけはひこそ高きもひきくもたのしくうれしくにぎはしくをかしけれ

橋本　丹江

たにのといつるうくひすはゑみそむる梅のこすゑにさへつりのへにおふるわかなもつむへくなんなりぬる

きのふきふいけの氷もとけそめて
かすみの衣はるはきにけり

玉のうてなのみや人はうたよむわさにいとまなからんしつかふせやのしはの戸もいりくるひとのたえまなしたかきいやしきたゝ一時にはるめきてへたてなきこそうれしけれ

田邊　定子

さえくらしたるきのふの空のけしき名殘りなく晴れ渡りて曇りなき御代の光り明らけく千里の外も一つに立つ春霞に木々のうら／＼打ち烟りてたはるゝ百鳥の聲も一入のどやかに見ゆるかし今日はとてみがきましたる宮人が車の光りもいとまどゆく今朝を千歳といなゝく駒の聲も春めき渡りぬる

にわらはらの聲もきよらに君が代の初春など歌ひいでたるは又のどけしとものどけしや天さかる鄙は行きかひの人もうとましくよろづさう／＼しけれど春立つけしきは花の都にもをさ／＼劣るまじくなん數らぬ垣根の中だに雪間の草若やかに色附き初め初菜つみにと出で立つ賤の子らもきのふ迄のいぶせき浮世の塵は掃ひつらんかしわきてむづかしき軒端ながら明らけき日の御旗立てゝ君が代の初春祝ふ心はかゝる片山里迄もかはらざならんなどゆかしう思はる

かく蒼生のいやしきものも沖つ波高き人も戸ざゝぬ今の御代に逢ひてさゝがにの亂らぬ空をいたゞき梓弓はるの光りを仰ぎて賤たまきのわらはまでも開け行く文の林におり立ちて巳がじゝうるはしき花を手折るもみな御代のめぐみならずやは

降田　槇子

明けく治まる御代も二十あまり八と云ふ年の春とはなりぬ暮て行く年浪を惜しむ人は多かれど春をかこつ人はあらじかしされパかけまくもかしこき九重の宮居と賤か伏屋と隔てなく長閉けき初春を迎へ千島のはてより沖なはの奥に至るまでおのおの業を休み門毎に松立てわたし軒毎に朝日の御旗をおし立てゝさかづき取かはしはかなきすさび事などして貴きもいやしきも同じ心に君か代の春を祝ふこそいともめでたけれことさへぐ支那の國に至れる丈夫は如何ならんこもまた今日は我が日の本の方に打向ひてことほぎつゝやあらん

おしなべて同じ心に祝ふめり
春立つ今日の四方の民艸

佐々有鄰子

山ざとも雪のとまやも梓弓おしなべて馬車ゆきかひしげき京大路も皇軍人の朝夕來集ふ廣島市も松竹にしめひきはへてそこのたか殿には弦歌の聲ありこゝのとまやには船うたうたふしあり久かたの天にとどろき荒かねの地をとよもすは是れなんこのまくらたかきつかさ人よりしづたまきいやしき女童までかぎろひの春をむかへてむらきもの心うちとけたちつつ居つつ樂をつくす宴になんあり

けるあなおもしろあなさやけ。

植木　鋼子

立歸る春のけふとしいへは花の都につかさ位高くいとやことなく榮ゆる人々いへも更也天下に鄙の果なる賤が伏屋に至るまで其玄なてそかはれ同し心に迎へいはゝぬ者なんなかるべき限りなき幾代の春上下共に玄たしみ和らきて各其ところに安んじ大君の御代の榮えをことふく我日の本こそ實に例なき樂しき國とはいふへけれ

一月廿日兼題　鶯告春

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　伊豫國新居郡大町村　藥師寺芳子

かきくらし雪はふれ共うぐひすの
今朝のはつねに春ぞしらるゝ

地　三河國東加茂郡阿摺村　横山きみ子

春をまつうらみも雪もうちとけて
軒にこぼるゝうぐひすのこゑ

人　東京市本郷區淺香町　落谷操子

花よりもさきに春をむつげにけり
うめづの里のうぐひすのこゑ

平野きみ子

深草のさとをおとづるうぐひすは
はるをや告るこゝろなるらむ

安井章子

あけ方に春をしらするうぐひすの
ふしおもしろき庭のたかむら

安井龜子

人とはぬ宿にしあれとうぐひすの
こゑきゝてこそ春はしりけれ

住山幾子

軒ちかき梅の咲けるもしらぬまに
春をしらせてうぐひすのなく

住山せの子

朝かすみたなびく奥にきこゆなり
はるつけそむるうぐひすの聲

うぐひすの聲聞ことのなかりせバ　花山やすゑ
いかでかしらんやま里のはる

立つはるは積れる雪に見えねども　花山みさを
なくうぐひすの音ぞしらるゝ

立つ春をまち焦れてやうぐひすの　花山きの子
はつねのどかに今朝ぞ聞ゆる

春きぬとおい木の梅にめづらしく　羽田三緒子
枝うつりしてうぐひすのなく

柴の戸を音づれてなくうぐひすの　梶井久子
はつねよ春をしりにけるかな

うぐひすの今朝なく聲の閑けさに　梶井仲子
山のおくまではるはきにけり

そこゝにまだ雪きえぬやま里も　磯野たま子
春しりそむるうぐひすのこゑ

今朝ははや庭の梅か枝たつねきて　村田喜代子
春きにけりとうぐひすのなく

木かげには雪まだきえぬやま里に　村田美都留
春つげわたるけさのうぐひす

雪深きたによりいづるうぐひすは　園生つる子
たがをしへてか春をしるらむ

わか宿はまだ雪ながらうぐひすの　神田錦子
聲をきゝつゝはるをしるかな

梅の香を尋ねてきなくうぐひすは　溝口惠子
ゆきのうちにも春やしるらん

雪はまだ消もはてぬにうぐひすの　浦島龜子
はつ音や春のしるしなるらん

二つ三つひもとく梅のこずゑには　浦島榮子
春つけわたるうぐひすのこゑ

梅のはなまださきそめぬ庭ながら　島田好子
はるに先たちうぐひすのなく

うぐひすの高きはつねに春はきぬ　松原常子
ゆきも氷もいまはものかは

都にもつげようぐひすしつがやの　楠精子
のきはの梅はゑみそめにけり

うぐひすの春つげしよりあさ夕に　野田千代子
待たれしうめも今さきにけり

窓の梅の匂ひもそめぬあしたより　荒川清子
はや春つぐるうぐひすのこゑ

はや春になりにけらしなしつがやの　中島　房子
雪もきえぬにうぐひすのなく

我ひとり春まちがてにおもひしを　水島　良子
早つげそむる今朝のうぐひす

降るゆきに春はいつぞと思ひしを　西村　菊子
一こゑつぐるにはのうぐひす

梅はまださくやさかずの頃なるに　西村　虎子
春つげがほにうぐひすのなく

あなうれし今やさくらん梅のはな　溝口　佳子
春つげそめてうぐひすのなく

雪のなかに春はきにけりやま里は　佐藤　春子
たにの戸たゝくうぐひすの聲

山里はまだきえやらぬ雪のなかに　五十嵐政子
はるまち顔にうぐひすのなく

青柳のいとうれしきはわがかどに　永井さい子
はる來とつぐるうぐひすの聲

うぐひすの初聲きゝしあしたより　大海原芳子
雪ののきばもはるめきにけり

人もこずゆきも消せぬやまさとは　松尾ます子
なくうぐひすに春やしるらん

春來ぬと歌ひ出てにしうぐひすの　檜村美世子
こゑさへ匂ふにはのうめか枝

白雪もまたきえやらぬやまさとに　河野　文子
はるつげそむるうぐひすの聲

世のことをよそにみ山の柴の戸に　木村　政子
はる音つれてうぐひすのなく

閑かなる春のしるしはうぐひすの　海島　信子
いまなき出でしねにぞしらるゝ

雪をれのたけの小枝にうつり來て　桂　慶子
春は立ちぬとうぐひすのなく

世は春になりにけらしな白ゆきの　田邊　貞子
古枝にとけてうぐひすの鳴く

谷の戸をけさたち出てうぐひすの　高橋　政子
よは春なりとうたふのどけさ

また咲かぬはなの梢をつたひつゝ　植木　鋼子
ひとり春まつうぐひすのこゑ

さそはれて梅もさくらむわが宿に　吉田　芳子
春をしふるうぐひすのこゑ

うぐひすの聞きこゑのなかりせば　堀江　鈴子
春來しことを志らであらまし

うぐひすの初音しなくばゆきの中に　芝山とよ子
咲きいてし梅は春を志らめや

春まつとさかぬうめをバ眺めしは　遊佐とよ子
うぐひすきかぬ昨日なりけり

うぐひすの聲をたよりに雪きえぬ　大橋てい子
山さとひとははるを志るらん

ふゆごもり咲き初にける梅か枝に　愛久澤備子
春をつげぬるうぐひすのこゑ

あづさ弓はるたちぬとや白ゆきの　久保田りつ
古すねぐらにうぐひすのなく

二つ三つこゑまひそめたる梅か枝に　伊東　滿子
はるをかたらふうぐひすの聲

うぐひすの聲にぞ春は志られける　田中　秀子
雪ふるさとのしづがふせ家は

はれやらぬ雪げの空もうぐひすの　吉岡すみ子
聞きこゑにはるぞ志らるゝ

うぐひすの春つげわたる一こゑに　野崎　錸子
谷のこほりもうごきそめけり

山の端にのこれる雪は去年ながら　高野　辰子
春や來ぬらむうぐひすのなく

こよみなき我やま里をたづねきて　畠山千代子
春をバつぐるうぐひすのこゑ

雪きえぬ我がやま里はうぐひすの　宇多田揚子
こゑきゝ初てはるぞしりぬる

梅もまだにほはぬ庭にうぐひすの　諸井くら子
はるつげそむる聲のゝどけさ

つくろはで去年のまゝなる庭の面に　松浦いと子
春つげわたるうぐひすのこゑ

梅もやゝほころびかゝる柴の戸を　館脇ます子
はるつげてなく深山うぐひす

たにの戸の氷とゝもにうちとけて　吾妻ちか子
春つげそむるうぐひすのこゑ

御園生の今朝さきそめし梅が枝に　大谷津琴子
はる志り顔にうぐひすのなく

ふく風のそらのけしきも變らぬを　木下　本子
世は春なれやうぐひすのなく

軒の竹ふしよくきなくうぐひすは　佐々有鄰子
　春つげわたるたよりなるらん

ゆきふかみ花もにほはぬやま里に　門野八重子
　まづ春つぐるうぐひすのこゑ

一月廿日兼題　伊勢詣の記

田邊　貞子

昔し弘安の御代には蒙古の寇事ありてさしもに世のさわがしかりけれど時の帝にはいたく御心をなやまさせ賜ひ御敕りの使立たせて諸々のみやしろに御祈りごとをきこえ上げ賜ひきとなんきゝ侍るを今年もまたから國と戈を交へ砲を構ふる事となりてかしこき御邊りを初め奉り國民の思ひ一方ならぬをわらは數ならぬ身にしあれど心の一はしをこそ神にも祈り佛にも念ぜめとて同じ心の友と長月のもちの日といふに神風の伊せ詣の道にぞのぼりぬる打ちつゞき日麗らかにて道いと早きをまして鐵の車のたよりにて十八日に志ざす宇治といふに着きぬあくる日つとめて朝淸めに身を拂ひ淸めやがて日の光り東の空にきらめく頃大宮にまうでぬ

抑々此宮は我國第一の大社にてあま照らす大御神をいつきまつり朝廷の御禮わきて厚しとかやきゝつるをさすがにまゐる人も多かり定めて國を思ふ同じ心の人々なめり祠の色いと色めきて鳥居御垣のたゞずまひまで神さびたり松風の聲水の音いとすみに〳〵て神代ながらのしらべいとゆかしく拜まぬ先きにまづすむ心地なんせらるる

　まうできてをがまぬさきに神垣の
　　松の音にもすむ心かな

まづまゐて來ぬる事の由をきこえ上げかつは國の成り行きの安らけく身の行先きのさきはひなど流も細々祈り上げて歸りぬるは入相のかねのきこゆる頃なりきやどりにつくやしきりに鈴の音のきこえければ何ならんとまつほどに平壤のかちしらせなりければみな〳〵うちよろこびて歌ども口すさびなどをかしともをかしともをかしきに今日の祈りの言の葉など思ひ合せてやがてまくらにつきぬあは

れ今宵のゆめ路はあはれ今宵のまぼろしいづれをかさ迷ひ何をか見んとする

吉田　芳子

何人のおはしますかはしらねども某のいひおきけむげにさる理に見えていとたふとし。しばし御前にぬかつきて五十鈴川清き流れの源を仰ぎ濁りなき御代をいのりぬ

そも〳〵此御社は畏こくも　天祖天照皇太神のしづまりすところにして三つの寶をも合せ祀れりとかやされば廣前に苔むせる瑞垣は遠き昔より動きなかりし姿にしてひきはへたる注連の長きは幾千代の末かけても榮ゆるしるしなるべし折しも神代ながらの調ならむ松ふく風の身にしみわたるにおどろきて目さむれば今日しも同じ學びの友かきより文おこされて近き内に伊勢の宮へまうづとて妾をもそゝのかせしなりけり

佐々有鄰子

神嘗の御祭典なりわが片山さと人も老若きうちつれ立て足ゆひかためて朝とくやどりをたちいでぬ道すがらひきもきらず馬に車にのりてはせ行もあり妾も母人に御供して此詣人の一人にはありける朝日の山のは三段ばかり立のぼりたるころ天照太神宮の此方の鳥居のもとにつきぬればもののね清清しうきこえぬるは今日の御祭の式なるべし八ひらでの音さへ耳をすましてひびきあひぬ實に神代ながらの恐こき御式なるらん柴垣の此あたりは詣る人も多ければひときはすすみて拜奉るは征清軍の人々の上安かれと祈ることそあらめ

二月兼題

- 五日
  - 歌……小式部内侍
  - 文……梅を見て
- 廿日
  - 歌……歸雁
  - 文……赤十字社に入社を勸むる文

餘芳

いせまうで（二）

坂正臣

常は、來宿る人もまれなる故にや、夜のもの丶設などもあらずして、薄らかなるしとねの、垢さへくまなくつきて、香染の色したるを、二枚ばかりさしいでたり。四人が中に、二枚の物を、たがひに引あひつ丶、打かつぎぬ。まどろむともなく、目さめて聞けば、あるじは、早起たりとおぼしくて、持佛堂に、鉦の音すなるも、すしようなりや。朝まだきに、又、うへのみ墓にまうで丶、飯など、例の竹の子の菜してたうぶ。この寺に高樓あり。あるじの、去るべするに隨ひて、のぼり見るに、こ丶、はた、千里の海やまを、ひと目に見わたす、いとも／＼、よきけしきなりけり。床には、すゞのや大人の肖像をかけたり。こ丶かして見めぐりをへて、今はとて、あるじに、宿かりつる料に、すこしのものおくるに、いかでか、かく多くはと、いなみてうけひかぬを、とかくにいひて與へおきて、松坂のかたへぞかへりける。その折のことゞも、今おもひいづるに、なつかしく、ゆかしくなん。今度、伴へる人も、

そのかみ、ともなひし人の一人なりけるまゝ、かたみに、しのびあひつゝ、すぎゆく。雨の氣、まさに晴れて、打渡す田の面、うち煙りたる、いとおもしろし。いにしへ、なにがしの皇居の「秋の田の穂の上にきらふあさがすみいづべの方にわが戀止まむ」と、よませたまひしは、かうやうなる折にこそと、思ひやり奉らる。さる程に、朝日の影、雲間を漏るまゝに、稲穂草葉などに、置渡せる露の、黄金色にひかり、銀色に照れるさま、いとまばゆく、をかしきを見て、伴へる人のよみける、

秋の田のつゆに朝日のさす時はこがねしろかね穂にぞいでける」。ことばは、なつかしからねど、心は、さることゝおぼえて、

しろかねもこがねも色やゆづるらんたり穂八束のとみくさのつゆ」。そのかみ、御杖代の姫みこの、住ませ給ひし所とおぼしくて、齋宮と名におふ里あり。こゝに、しばしやすらひ、猶、里々をすぎて、宮川につく。水いみじく清くして、さゝれの數よみつべし。

うち日さす大宮川の底みれば玉しく庭にさも似たるかな」。まづ、外宮を拜み奉る。かの雄略天皇の御夢に、内宮の大御神の、みえさせ給ひて、むかし、わが朝

夕の御饌を掌りし、豊受の大神を、わがもと近く、祭りたまへ。われ、一所にては、いと苦しと、のたまひけるより、丹波の國、比治の眞名井原におはしましヽを、ここに、移し奉りたまひけんことなど、思ひ出られて、たふとしなどは愚なり。岡本町の、藤屋といふに、宿をさだめおきて、さて、宇治なる、扇の屋ぬしを訪ふ。こは、この男どもの、幼かりし頃の師にて、今は、大御神の宮の、主典にて、つかへらるヽなりけり。やがて、みづから、出迎へて、三とせ、四とせ、あひ見ざりしほどの事ども、とひみ、かたりみ、互に、よろこぶこと限なし。くれてのち、やどりにかへる。

三日、今日は、扇の屋ぬし、御饌つかふる當番のよしなれど、外宮の參拜所といふ所に、とひゆきしに、行在所を始として、五丈殿、九丈殿、多賀宮、風宮、上宮などへみちびかれ、また、月讀宮といふへも、あないせらる。この宮は、外宮より、すこし、隔たりたる、神々しき森の内にありて、めぐりの池は、水草繁く生ひたり。ここに、鴛鴦のすみて、年毎に、子うむ巣は、汀の木の枝などに物するを、雛をとり來て、飼ふ人も多かりなど語らる。ぬしにわかれて、内宮に參る。五十鈴川の清き

流に、手あらひ、口すゝぎて、大前の眞砂に、額つき拜むほどの心は、われながら、われならぬばかりに淸まり、神々しくおぼゆ。御垣の外を、一めぐりして、風日祈の宮へむかふに、みかぐら殿の前にて、昔、親しくせし星の屋といふ人にあひつ、この人、こゝに來てあるよしは、きゝつれど、久しく、ふみだにかよはさゞりしかば、かたみに驚き喜びぬ。打つれて、橋を渡るに、川水あせたる所を、猿の、七つばかり、むれて渡る。中には、ちひさきを背負ひたるもある、いとめづらかにをかし。

うちむれて遊ぶをみれば猿もまた友の多きやたのしかるらむ」と、いへば、伴へる人、

ねたみあひのゝしりあへるひとよりもましらなればやむつびあひたる」。

（つゞく）

學園

家庭歌訓 修身百首

例言

世に、歌を以て、敎としたる書は、あまたあれども、普くもてはやさるゝものは、小倉百首なるべし。此は、さすがに、其の道の聖の手になれるものなれば、高尙優美にして、調たかく、姿きよげに、詞の外に、あはれを覺ゆる歌のみおほし。後の世に至りて、是にならひ、何百首、くれ百首とて、あらはれたる書ども多かれども、小倉百首の上にたつものはあらざるべし。古より、今に至るまで、上下おしなべて、めではやすもことわりなりけり。されど、此は、歌學上のをしへとしたるものにて、身を修め、行を正す敎としたるものにあらざれば、歌の意に至りては、父母、兄弟、姉妹、夫婦などの、まとゐせるむしろにて、說きあかすべくもあらぬもの多し。幸にして、世の人、其の高尙優美なる所を賞し、すぐれたる歌としてめづるが故に、甚しき弊害もなきことなれど、其の意をとり、趣をまなぶやうになりたらんには、風俗を害し、世道を亂すことも少からざるに至りぬべし。抑、敎の道に、種々ありと雖、身を修め、行を正すより、大切なるはなし。身を修め、行を正すは、家庭のをしへを、第一とす。彼の小倉百首の如きは、其の家庭のをしへの一科となりて、常

牌にあそむれ、口に誦せらるゝ世のならはしとなりたれど、是、大なる誤なるべし。おのれ、疾くより、此の誤を正し、家庭の敎の一科を改めんものと、古今の歌の中にて、尤、修身正行の敎となるべきもの百首を撰び集め、一々、其の意を說きあかし、兼ねて思ひよりつる事どもを述べ記して、小倉百首の代に充てんとす。其の撰擇の疎なると、解義の詳ならざるとは、淺學の然らしむるところ、敢て、自安んぜずといへども、亦、以て、風俗を正し、世道を保つに足らむ。

撰歌の順序は、古今に係はらず、新舊によらず、先、敬神、國體、君恩、親恩、忠、孝、友、和、信を始として、貞操、節義、禮儀、廉耻、剛毅、忍耐、正直、謹身、勤勉、遵法、博愛、度量、恕等の諸德に從ひて序列せり。故に、其の意を同じくするものは、成るべく、同じところに擧げたること、明倫歌集の體裁の如し。

解釋は、務めて、文章を平易にし、語句を簡畧にし、如何なる人にても、一讀すれば、其の意を悟り得るを旨とせり。故に、往々、詞の卑俗にわたれるものあり。又、時としては、本歌を詠みし當時の意を畧したる處あり、敷演したる處あり、肯綮にあたらずして、隔靴の憾なきにあらざる處あり。其は、此の書は、家庭の敎に供するを旨としたれど、務めて、修身正行の方に說きなせるを以てなり。見ん人、其の心して讀み給へかし。

家庭歌訓 修身百首

杉谷正隆

後宇多天皇

天つ神國つやしろをいはひてぞわがあし原の國はをさまる

天つ神とは、天上にて生れまし丶神を云ひ、國つ社とは、此の國土にて生れましし神を云ふ。神と云ひ。社といふも、社は、神を祭りたる處なれば、同じく、天地の神々と云ふことなり。○いはひてぞとは、尊び敬ひて齋き奉ることなり。○わがあし原の國とは、我が大日本國なり。上古は、葦の生へてありし故に、葦原とは云へり。さて、葦の、多く生へたる處は、豐饒なる土地なれば、我が國の萬國に勝れて、豐饒なるよしを稱めて、葦原の國とは云ふなり。○一首の意は、我が國は、神國なれば、上、天皇を始め奉り、下、人民に至るまで、皆、敬神の心を厚くし、天地の神々を齋き祭り、仕へ奉りて、始めて、國土、安らかに治ま

り行くべきものぞと宣へるなり。

我が國は、伊邪諾伊邪冊の二神、天つ神の命を受けて、修理固成し給ひ、山の神、海の神、河の神、木の神、草の神、土の神、火の神、五穀の神等を始として、種々の事物を掌り給ふ神等を生み給ひ、夫々に分掌せしめ給ひしかど、山川其の處を得、萬物悉く、備り、宮殿家屋器具等に至るまで、一つとして足らざることなきに至れり。是に於いて、二神、天照大神、月讀尊、素盞嗚尊を生み、天照大神を以て、天下の主とし、月讀尊、素盞嗚尊を以て、之を補佐せしめ給ひぬ。其の後天照大神は、皇孫瓊々杵尊をして、此の國に君臨せしめ給ひしかバ、其より列聖相繼ぎ給ひて、皇統連綿、天地と共に變らせ給ふことなし。而して其の神々等の子孫、及び代々の天皇の御子孫は、年をへ、代を重ぬるに從ひて、漸次に繁殖し、遂に今日は四千餘萬の多數なる民人とはなれるなり。されバ、天皇は正統に當らせ給ひ、人民は支統に當り、猶、宗家と支家との間の如し。假令、一本の幹より、數萬の枝葉の生せるに異ならず。此の如く、神の創造して、神の子孫繁殖し、一の國家を組織せるを以て、古より、我が國を稱して、神國とは云ふな

り。故に、天つ神、國つ神と云ふも、彼の宗教家のいはゆる、想像的の神にはあらずして、皆、人民の祖先を指して云へるなり。其の祖先の創造し給へる國に住み、祖先の餘澤を蒙りて、安樂に生活する人民、如何でか、之を尊敬奉仕せざるを得む。遠を追ひ、本に報ゆるは、禮の、尤、大切なる所なれど、子孫人民たるものは、一日も敬神の事を忽にすべからず。且、祖先に敬事するは、即、父母に孝なるなり。父母に孝なるは、即、君に忠なるなり。忠孝は人倫の大道にして、百行の基礎なれば、此の忠孝の風にして、一世の俗をなさば、國家いかでか治まらざらむ。況、祖先の神靈、昭々として、幽助し給ふに於いてをや。是、後宇多天皇の御製に、我が國は、天神地祇を祭りて、始めて、安らかに治まるぞと、宣へる所以なるべし。然るに、世には、我が國の神を以て、佛や耶蘇なぞの如く、社を以て、寺院會堂なぞの如く思ひ誤り、尊敬を忽にするものなきにしもあらず。此の如きは、實に祖先に對して不幸の極と云ふべきなり。

藤原爲守

みな人のいのるこゝろもことわりにそむかぬ道を神やうくらむ

ことはりとは、道理なり。○一首の意は、世の中の人が、種々の事を以て、神に祈願するも、其の心が道理に叶ひて、正しき道を、神は納受ましますならむ。若し、不正の心にて、不正なる道を以てせば、如何ほど祈願しても、神は、決して、納受し給ふまじとなり。

神は不正のものに非ず。いかでか、非禮不道を受け給ふべき。諺にも、正直の頭に神は宿ると云へる如く、正直ならざれば、神の之を守り給ふ筈はなし。然れども、世の愚なるものは、不正の事を以て神に祈り、非道なる幸福を求めんとす。是大なる誤なり。たま〳〵。祈るに不正を以てして、幸福を得たるものありとも、其は僥倖のみ。神之を納受して、授け給ひし幸福にはあらざるなり。神は人の祖先なれば、僅少の無理は、納受あるべしとも思はるれども、決して然らず。現在の巳の子なりとも、非道に使用すべき物品を請求したらんに、直に、之を諾して、與ふる父母はあるべからず。若し、之を與へたらむには、自、其の子を害ふものなり。是、不慈の父母たるを免れず。祖先も亦然り。若し、授ぐるに非道の幸福を以てせば、不正の神たるを免れざるなり。父母は、猶、歎くべきも、神靈は誣ふべからず。如何に

虚飾巧言を以てすとも、豈、之を瞞着することを得んや。此は、啻に、神靈のみにあらず。人も亦此の如し。道理に背き、不正なる事を知らバ、誰か、甘んじて、之を受くるものあらむ。然れども、人は神の如く、顯、幽、共に明智するを得ず。故に、一時は之を瞞着して、非道をも受けしむることを得れども、隱れたるより顯るゝはなしとて、自然に、後には、察知せらるゝに至る。顯幽と云へども、實は、幽はなきものと思ふべきなり。人は知らずと思へども、神は之を知る。己ひとりは、如何に隱すとも、自然に人の知るは、即、神の云ふものなり。神には口なけれども、人の口を借りて之を云はむし。故、に一時は隱れたりとも、幾くもなくして、世に顯るゝなり。されバ、幽冥なる神に對するも、顯現なる人に對するも、決して、道理に背きたることを以てすべからず。常に、昭々として日月の如く、一點の不正をも言ふべからず。行ふべからず。又、人に施すべからず。求むべからず。

土御門内大臣

もろこしの代々はうつれどおきしまややまとしまねは久しかりけり

もろこしとは、支那を云ふ。○おきしまは、大和の枕詞なり。やは接續辭にて、詠

歎の意を含めり。○やまとしまねとは、我が大日本國を云ふ。○一首の意は、支那の國は、我が國の如く、皇統一系の國にあらず。如何なる人にても、強きものは、起りて國主となる國體なれど、其の代々は、常に移り變れども、我が國は然らず。たとひ、幾千萬年をふとも、天地のあらむかぎりは、皇統連綿として、少しも變らせ給ふことはなしとなり。

天祖、天照大神の、瓊々杵尊をして、我が國に、君臨せしめ給ひし時に、皇位の御しるしとして、三種の神器を授け給ひ、葦原の中つ國は、吾が子孫の君たるべき國なれど、汝皇孫、行きてしらすべし。天つ日嗣の隆えまさむこと、天地の共窮なかるべしと宣ひたりき。されば、我が國の君として仰ぎ奉る所の皇統は、天地のあらむかぎりは、變らせ給ふことなきなり。上にも、已に云へるが如く、此の國は、諾、冊二神の創造して、天祖に傳へ給ひしものなれど、即天祖の御國なり。既に、天祖の御國なれど、天祖の正統に當らせ給ふ御子孫が、統御ましますべきは、動かすべからざる道理なり。又、人民も、諾、冊二神より別れたる、支統の子孫なれば、誠心誠意を以て、其の正統にまします天皇に仕へ奉る

征清軍紀念碑設立廣告

今回大阪府下河內國讃良郡飯盛山下四條畷別格官幣社贈從三位小楠公社地內ヘ征清軍紀念碑ヲ設立ス有志ノ諸君ハ陸續御寄付アランコトヲ

一銃劍ヲ模シ高サ五丈トシ中空ノ鑄造ニシテ全部ヲ金箔塗リトナシ表面ニハ征清軍殉公之紀念ノ八字ヲ鐫刻シ礎臺ハ花崗石ヲ以テ組立テントス此ノ經費建築概算ハ一萬四千圓

一成功期限ハ本建築ノ難易如何ニヨリ長短ノ別アレトモ二月ヨリ起工シ五月三日小楠公五百五十年祭迄ニ竣成セントス

一賛成金ハ可相成本月中ニ御寄贈有之度事

明治廿八年一月

發起人　西村捨三

賛成人　辻新次　西澤之助

事務取扱　森敬一郎

本事務ハ東京々橋區築地二丁目廿一番地國光社森敬一郎取扱候間御書通ハ同人ヘ宛御差出被下度候

女鑑第七十八號目次

【明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可】

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及遞運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
毎月貳回　五日　廿日　發行
定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿八年一月二十七日印刷
同　年同月二十八日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)